



2013年2月ビーレフェルト大学



2013年3月同済大学



2013年10月APRU事務局長



2013年10月ミャンマー大臣



2013年10月ライズ大学



2013年10月上海交通大学



2013年12月スイス大使

Visitors from Overseas 2013-2014 海外からの表敬訪問



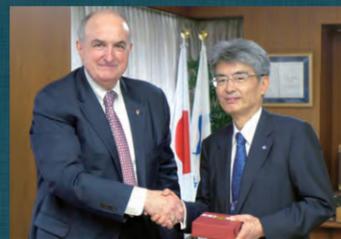
2014年1月サンパウロ大学



2014年3月ハンガリー外務省



2014年4月廈門大学



2014年5月インディアナ大学

Ⅲ 社会との交流

Relationship with Society





人とのあたたかい交わりから
独自のリーダー像を構築
「理だけでない」心の通う、人間本位の経営をめざして

岩田松雄 Masuo Inaba
リーダーシップコンサルティング代表

経済学部卒業後、サラリーマンや海外留学を経て、経営者に。現在コンサルタントとして全国を駆け回る岩田松雄さん。経営者として、多くの企業を支え、建て直しを行ってきた経験を活かして、現在は企業の存在理由(ミッション)の大切さを説いている。

経済より経営がおもしろいと直感

岩田さんの生まれは大阪市内。それも梅田の中心地だ。「野球がやりたくて北野高校に。大学も、家から近い阪大しか考えていなかった」。経済学部に進んだが、専門課程の初回の授業で経済学に違和感を持った。「『経済原論』で、経済学は、人間は合理性を持つことが大前提と教わったのです。直感的に『おかしい』と思いました。そんな人間はいませんから(笑)」。後になって、確率論などを導入することで、経済学も現実的な人間の行動を扱えるということを知ったが、「合理性や数字ば

かりの経済学より、人を対象とする経営学の方がおもしろい」と感じるようになった。

「多士済々」だった北野ゼミ

ゼミの担当教員は、経営学の北野利信先生。他大学から着任したばかりで、「ゼミ生は自分を含め、『あぶれもん』ばかりだった」という。それが良かった。伝統的な「まじめな阪大生」の型にはまらない、ユニークな人間が集まっていた。ゼミは原書の輪読が中心で難しかったが、先生はいつも論理的にいろいろな見方をする人だと思った。口ぐせが「要するに…」。物事の本質を分かりやすく説明してくだ

さった。そんな先生でも、自分が知らないことに関しては、とことんまで学生にも意見を聞く。その謙虚さも尊敬した。

「『東大でも教えたことがあるが、ほとんどの学生のレベルは君たちと変わらないよ』と言っておられた。野球少年だった私という人間も100%認めてくれる先生でした」。心の通った師弟の交流は、今でも続く。

当時、「日本的経営」論をめぐる本が流行。そんな本も、研究室の棚から借りて読んだ。縦社会、ムラ社会といわれる日本企業。日本の歴史的な文化論とも関係して、人をどうリードするか、マネジメントするかが論じられていて、興味をもった。これが、今の活動にも結び付いている。

課外活動では野球部に所属し、投手として活躍。同期には強豪高校出身の逸材が多く、チームは近畿リーグの一部に所属していた。1年次に膝を痛め1年以上リハビリ生活をしたが、「3年の秋季リーグ最終戦に、チームメートに



大学生時代に所属した野球部では投手として活躍した

初登板のお膳立てをしてもらった。9回を投げきり、勝利投手になったことが忘れられない」

人との出会いが自分をつくる

岩田さんは「人」との出会いを大事にする。数多くの企業から内定を受けた中で、日産自動車への就職を決めた決定的要因も「人」。

10月1日の内定式直前まで、日産に行くか、大手商社に行くか、都市銀行に行くか考えあぐねていた。まさに9月30日、日産の先輩と話をする機会があった。積極的に入社を説かれるわけでもなく、日産マンとして活躍する体験談を嬉々と話す先輩の姿に憧れ、「こんな人になりたい」と思って入社を決意した。

日産では、販売会社にも出向し、新車セールスも担当した。「社長賞」を取ると決め、地道な活動をして独自に販売ノウハウも身に着けた。その結果、歴代出向者の販売台数記録を作るほどの成績を上げた。全スタッフの前で、

出向先の社長(後の日産自動車の常務)から、「岩田は、この期間に2万枚の名刺を配った。誰よりも一番努力した」と褒められた。プロセスまでしっかり見てもらっていたこと、その気配りがとてもうれしかった。

追い込まれて気づくこともある

その後も真面目に勤めたが、次第に力をもてあますようになった。そんな中で、社内留学制度を知った。米国のビジネススクールに2年間、費用は全額会社がもってくれる。苦手だった英語を必死の努力で克服し、30倍の社内選考を突破する。「TOEIC300点台の成績から、猛勉強で最終的には900点台まで行きました。あまりの上昇ぶりに人事部からカンニング疑惑もつけられました(笑)」

しかし、そこから留学までの道のりが凄まじかった。留学に向けてすべきことが山積しているのに、仕事が忙しく、勉強の時間がない。そのプレッシャーから、眠れず、食



UCLAより「歴代全卒業生3万7000人から選ぶ、インパクトのある100人」に選出された岩田さん。東京で行われた授賞式でOlian学長と記念撮影

岡正篤など、東洋哲学の本を読みあさりました」。この時期に吸収したものが、その後、ザポディショップ、スターバックスなどの経営に携わった時に生かされた。毎週月曜日、全社員にメールでメッセージを送り続けた。その継続が、社員らの心を引きつけ、組織の立て直しにつながった。

UCLA「インパクトのある100人」

現在は自らコンサルティング会社を経営。執筆、講演活動に明け暮れる毎日だ。

「経営には、和魂洋才が求められる。米国流のコンサルティング手法を学んでよかったと思うが、人を理解し、人を動かさないと、良い経営者にはなれない」

そんな岩田さんを、UCLAは「歴代全卒業生3万7000人から選ぶ、インパクトのある100人」の1人(日本人は4名のみ)に選出した。もちろん、日本での経営実績を認められてのことだ。



グロービス経営大学院での講義

大学に望むこと、学生に求めること

映画『スパイダーマン』の名言「大いなる力には大いなる責任が伴う」を引用しながら、岩田さんは語る。「地位やパワーを身につけることは責任が増えること。ところが日本のエリートは、勉強さえできればよいと人格教育を受けていないから、責任をとらない人間が生まれる。権力ばかりに目を向けて、その責任を考えさせない日本のエリート教育は化け物をつくっているんですよ。パワーを持つエリート達には、そのパワーを自分のためではなく、世の中のために使うという教育(ノブレスオブリージュ:noblesse oblige)が必要だと思う。ドロッカーは『地位は責任であって、権力ではない』と言っています。上に立つ者は、より多くの人の幸せを考えるべきではないでしょうか。学生も、教える側もしっかりこの事を意識してほしい、と力を込めた。

「理」よりも「情」を大切にしたい

カリフォルニア大学LA校(UCLA)のビジネススクールで、経営者に必要な知識を2年間学んだが、米国流のすべて損得だけを考える講義に、飢餓感と疑問を感じた。経営には「理」だけでなく「情」の部分も必要だという思いを抱え、「休暇期間中は論語、老子、陽明学、安



最近出版された岩田さんの著書。『ブランド』と、『君にまかせたい』と言われる部下になる51の考え方

●岩田松雄(いわた まつお)氏
1958年大阪府生まれ。82年大阪大学経済学部卒業。日産自動車入社後、米国MBA取得。外資系コンサルティング会社勤務の後、イオンフォレスト(ザ・ポディショップ・ジャパン)社長、スターバックスコーヒー・ジャパンCEOなどを務める。11年リーダーシップコンサルティング設立。著書は、『スターバックスCEOだった私が社員に贈り続けた31の言葉』、『ついていきたい』と思われるリーダーになる51の考え方、『ミッション』、『ブランド』など多数。

Alumni Interviews OSAKA UNIVERSITY

2013年9月発行 大阪大学ニュースレター61号 掲載 人物登場 OB・OG訪問 より



●山岸景子(やまぎし けいこ)氏 兵庫県生まれ。83年大阪大学薬学部薬学科卒業、田辺製薬株式会社入社、研究企画室に配属される。社長秘書、秘書課長を経て、人事部人材育成課長に。2008年1月よりアストラゼネカ株式会社に教育企画グループのマネージャーとして転職。2010年から人事総務本部総務部長を務める。薬剤師、キャリア・ディベロップ・アドバイザー(CDA)資格をもつ。日本秘書協会顧問。

山岸景子 Keiko Yamagishi アストラゼネカ株式会社 人事総務本部総務部長

生来の「負けず嫌い」で、仕事にも趣味にも全力投球

大阪大学薬学部を卒業後、製薬会社の研究企画スタッフというキャリアからスタートし、社長秘書、人材教育担当と、独自の道を歩み続ける山岸景子さん。現在も、外資系医薬品メーカーで総務部長として、リーダーシップを発揮している。

掘する部署。いわば、研究開発のバックオフィスだった。6年間、ここで直属上司のアシスタントとして、学会発表の資料作りや調査に携わった。ところが、その上司が出世を続け、ついに社長になった。それまで社長の仕事を手助けしてきた山岸さんは、実力を買われ、社長秘書を務めることになったのだ。

田辺製薬に就職したのは、偶然の成り行きだったが、「秘書という仕事を歩むことになったのも、全くの偶然」と笑う。

家族のサポートでスムーズに職場復帰

社長秘書となって、さまざまな方面へ仕事広がった。株主総会用の資料には目を通さないといけない。財務会計の勉強も欠かせない。会社が発表する「経営方針」の草稿作りに参加することもあり、国内外の経済情勢や業界の動きなど、「各方面への目配せも必要になった」という。

薬学の世界とは全く違うことも学ばねばならなかった。戸惑いもあったはずだが、「自分に与えられた仕事は何であれ必ず好きになろう、最大限に楽しもう」。そんな気持ちで何にでもぶつかっていった。「負けず嫌いなんです」

そのころ、出産直後だった。「慌ただしい時期でしたが、実家のサポートで産後はすぐに復帰できました」。社内結婚だったので、夫から会社の動きを毎日教えてもらえた。おかげで、職場復帰がスムーズにでき、有り難かったそう。

研究企画スタッフから社長秘書へ

山岸さんは薬学部時代、恩師の紹介で、すんなりと就職が決まった。薬理学研究室の岩田平太郎教授が、田辺製薬の当時研究開発本部長兼研究企画室長だった千畑一郎氏の旧制浪速高校の後輩で、親しかったという。「だから私は、大学時代に就職活動をしたことがないんです。今から思えば、信じられない話ですよ」

学部時代について尋ねると、「忙しかったですね。特に4年生の時は、早く就職が決まったので、実験に没頭しました。就職した後で『自由な時間がいっぱいできて、うれしいな』と思ったくらいです」

配属された研究企画室は、文献を調査したり、製品開発などに関わる「研究のタネ」を発



写真の右から3人目、水色のドレス姿が山岸さん。卒業式後の謝恩会でのひとこま。当時、薬学科は40人のうち、39人までが女子だった

自分に与えられた仕事は何であれ必ず好きになろう、最大限に楽しもう

山岸景子

ベストセクレタリーに選出

社長秘書を務めて3年目、秘書課長から「日本秘書協会のセクレタリー・コンテストに応募したらどうか」という打診を受けた。「私が?」とびっくりしていたら、「アピールポイントがあるから入賞できるよ」と課長。いわく、「理系の専門知識を備え、新薬開発などの資料を読みこなせる社長秘書は珍しい」。しかも国際会議などでは、英語を駆使して社長補佐もできる国際派だ。

勧めに従って応募すると、課長の予想は見事に当たった。山岸さんは92年の名誉あるベストセクレタリーに選ばれたのだ。「表彰式では、社長も阪大の恩師も心から喜んでくれました。偶然からスタートした私のキャリアですが、こうして実を結んだことに、感謝の気持ちで一杯になりました」

社長秘書としてのキャリアを積み、新しい仕事に挑戦したくなった山岸さんは、さらなるステップアップをめざし、課長試験を受けて合格。秘書課長、秘書室長を経た後、人材育成課長として、新人研修など各種研修の責任者となった。「秘書の経験を生かして、接遇などは自分で講師をしました」



社長の千畑一郎氏(右)と秘書課長の中村泰三氏(左)とベストセクレタリー受賞時の1枚

2004年からは、営業本部の人材育成課長として、新人MR(医療情報担当者)に対して、業界の認定資格であるMR認定試験の受験対策を任された。家庭教師しながら、社員に寄り添いながら勉強を指導。薬学部時代に培った薬理学の知識などが活かされた。長らく8割程度だった田辺製薬社員の合格率を、100%に引き上げた。

成果を買われて大きな転機

そのころ、製薬業界は再編の嵐の中にあっただ。田辺製薬が三菱ウェルファーマとの合併に向かって突き進んでいく姿を見て、山岸さんは一つの決断をする。

「MR認定試験の合格率底上げが、アストラゼネカに評価されたようでした。ちょうどいい機会だと思い、オファーを受けたのです」。日本市場での躍進をめざす外資系医薬品メーカーにとって、山岸さんがもつ日本風土に適合した人材育成ノウハウは魅力的だった。

ただ、転職を決めてからも、最後まで若手社員の受験勉強に付き合った。「私が退職したのは2007年12月末でした。MR認定試験は毎年12月。もっと早く転職することもできましたが、試験が終わるまでは、みんなとともに頑張りたいかったです」

2008年1月、アストラゼネカに入社して、教育企画グループマネージャーに着任。現在は、人事総務本部で総務部長として重責を担っている。

自己アピール力を磨いてほしい

どんな時も、物事に全力で立ち向かう山岸さん。多忙であるからこそ、趣味を大切にしている。3歳から始め、小学5年生で中断していた日本舞踊の稽古を、最近復活させた。「趣味の時間は、自分をリセットするいい方法です。昔

習ったことをやり直せば、途中で空白時間があっても、今からスタートするよりも、もっと上達しますよ」

書道の達人でもあり、阪大では書道研究会の幹部も経験。その腕を生かして、社長秘書時代には、礼状などを毛筆で作成し、相手に対するちょっとした心遣いも忘れなかった。

今でも日本書芸院無鑑査・読売書法展会友として書展に出品し続けている。仕事以外でも、前向きな気持ちで人生を楽しみたいと思っている。



隆墨会(榎本白瑠氏主催)社中展の作品

最後に企業の人事サイドから、就職活動にあたって特に外資系メーカーを志望する学生へのアドバイスをもらった。

「企業側は文系、理系出身という目で学生を見ていません。問題は『うちの企業で何をしてくれるか』。その人の総合力を知りたいのです。語学力や基礎学力は必要ですが、コミュニケーション能力はもっと大切。自分が打ち込んだことを自分の言葉でアピールする力を身につけてください。大阪大学は歴史のある素晴らしい総合大学であり、いろいろな人とキャンパスで交流できる。学んだことを生かして、大学時代も卒業後もプロアクティブに活動してほしいですね」



時には視点を变えてものごとを広く捉えると好奇心の先に見えてくるものがある。

中嶋大

Alumni Interviews OSAKA UNIVERSITY

2013年12月発行 大阪大学ニュースレター62号 掲載 人物登場 OB・OG訪問より

「やってみなはれ」に後押しされモノづくりへの情熱を持ち続ける 積極的に提案・実行、大型プロジェクトも

サントリーグローバルイノベーションセンター ビジネス開発部 中嶋大 Takeshi Nakajima



●中嶋 大(なかじま たけし)氏 1981年生まれ。滝川高校卒業。大阪大学工学部応用理工学科卒業後、同大学院を経て2006年サントリー入社。九州熊本工場で天然水、お茶の製造設備立ち上げに従事。10年エコ戦略部に異動、再生可能エネルギー導入検討等に携わる。13年4月生産研究企画部を経て、9月よりサントリーグローバルイノベーションセンター(同年4月設立)ビジネス開発部で自らの中長期革新課題の実行にあたる。

は財産」という。マレーシアでの国際学会で研究報告する好機もつかんだ。

「やってみなはれ」にひかれ

就職はやはり「モノづくりをしている所へいきたい」とメーカーを希望。はじめは「自動車製造か電気関係へ」と決めていたつもりだったが、就職活動の中で、サントリー創業者の鳥井信治郎氏が折にふれ口にしてたという「やってみなはれ」の精神にひかれるものを感じた。「自分のやってきた研究をいかすというより、むしろ、いろいろな新しいことを経験したいと考えていましたから、心に残った言葉になりました」

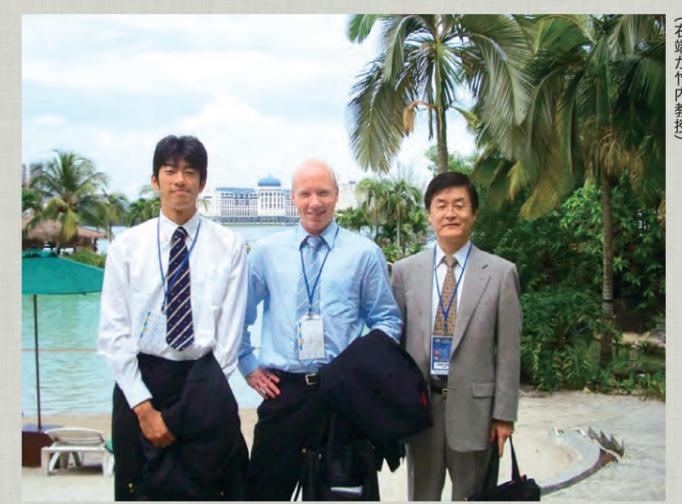
2006年、サントリーに入社し、九州熊本工場に配属。天然水やお茶の製造設備増設に携わった。包装レイアウト設計や、従来のボトルの高温殺菌充填から、常温での無菌充填への転換。業界初となるエコ殺菌システムの導入は、入社3年目にして関わった数十億円規模の大きな仕事だった。

5年目に東京のエコ戦略部へ異動。事業と環境戦略を推進するための組織としての中長期の環境目標設定や技術導入に従事した。工場の敷地内に大規模太陽光発電所(メガソーラー)を設置するプロジェクトを任せられ実現にむけて奮闘。13年春には生産研究企画部に移り、「サントリーのモノづくりにおける中長期革新課題」を提案。秋からは自らの提案を実行する任務を担い、現在の職場へ。ソフトドリンク分野のグローバルな将来像を描きながら、技術開発の道を探っている。

「わからないことは、ためらわずに人に聞きサポートをもらう」という。さらに「なんでそうなのかなと原理原則をしっかり捉え、考えながら行う仕事の進め方は、大学での学びの場で培った姿勢が生かされている。九州熊本工場時代、設備設計から立ち上げ、試運転と一連の工程に関わらせてもらった時、経験やノウハウがない中でやってこられたのも、それがあったからこそだと思う」

スポーツを通じて学んだ

モノづくり大好き少年はまた、スポーツマンとしても成長した。父の仕事の関係で小学3年まで5年間暮らしたブラジルではサッカー、帰国後は野球に親しんだ。中学時代に始めたバレーボールは、阪大に入って最も熱中した。「大学では、休みも含めてバレー中心の生活で



マレーシアでの国際学会へ恩師に同行し、研究報告する機会も得られた。(右端が竹内教授)

」。3年秋のリーグ戦直前に足首のじん帯を切るけがをしたものの、試合に出たい一心で医者に相談し、ギプスをせず、テーピングとサポーターで患部を固定して出場を決断。この時、阪大バレーボール部は全勝し、4部から3部リーグに昇格した。バレーボールを通して協調性やあきらめない気持ち、仲間の大切さを学んだという。



阪大バレー部の仲間や、トロフィーを持っているのが中嶋さん

学生は「しんどいことに全力を」

2013年9月の異動で東京から大阪府島本町に職場が移り、妻と4歳の息子、愛犬と離れて暮らす。もともと、東京への出張も多く、毎週末は神奈川県の実家へ帰り、家族には学生時代の自炊で磨いた料理の腕をふるう。地元のバレーボールのクラブチームにも所属。時には大学時代のチームメイトらと集まり、試合にも出場する。ただ「今は楽しむための遊び。体力も落ちるばかり。OB会などの機会に現役学生たちの姿を見ると、懐かしく、うらやましい。後輩には、スポーツでも学業でも、しんどいこともあるでしょうが、今しかできないことに真剣に取り組んでほしい」と話す。

学生生活を満喫した阪大への思いは今も深い。「自由な気風はととてもよかった。その中で学生は考え方を学べるので、今の環境を大事

にしてもらいたい」。学生へは「就職に際しては大学での専攻に縛られがちだが、それしかないと思いつくのは損。自分の経験からも、時には視点を变えてものごとを広く捉えると、好奇心の先に見えてくるものがあると思う。また、できない理由はすぐ見つかるが、簡単にあきらめずに、課題を考えて粘り強く取り組むことが大切」と助言する。

Think Globally, Act Locally

心がけている好きな言葉として「Think Globally, Act Locally」を挙げた。「世界を目指すということではなく、目の前の物事について、広く考え、こつこつ取り組む姿勢を大切にしたい」

「上司に恵まれて、いろんなことをやらせてもらっている」。まさに「やってみなはれ」の言葉通り、考え、望めばやれる環境と持ち前の行動力で快進撃を続ける。

「好奇心を武器に、これからもどんどん面白いことに取り組みたいし、自分だからこそのことに挑戦したい」。身長188cmの偉丈夫は、静かに、かつ力強く語った。

企業情報

サントリーホールディングス株式会社

1899年鳥井信治郎が、ぶどう酒の製造販売をする鳥井商店を大阪市に創業。1921年株式会社寿屋設立。京都・山崎に日本初のモルトウイスキー蒸留所を建設、国産ウイスキー製造へ。63年社名をサントリーに。2009年食品、酒類等多分野の事業を統括するサントリーホールディングス設立。「人と自然と響きあう」を理念に高品質の商品開発、サービス、文化、環境活動を展開。本社・大阪市北区。サントリーグローバルイノベーションセンターは、13年4月、中長期視点で「新たな価値の創造」を促進するべく基礎研究部門を独立させサントリーホールディングスの傘下に設立された。

京阪人として 日本社会を理解し 成長し続けたい

観光の魅力を中国に向けて発信中

京阪電気鉄道 経営統括室 事業推進担当(観光) 朱 晓斐 ZHU XIAOFEI

中学時代から学んだ日本語力を生かし、中国から留学して大阪大学大学院経済学研究科で学んだ朱晓斐さんは、京阪電気鉄道で初めての外国人社員として採用された。入社から3年目を迎え、中国からの観光客誘致に取り組む日常の中で、「中国人であるからこそ、できることを大切にしたい」と感じている。



朱さんのブログ「走在京都的千年小路上」 URL <http://blog.sina.com.cn/keihan>



日本人と同じ思考になってはいけない。私らしさを大切にしないと、アピールポイントがなくなってしまうと思うのです。

朱 晓斐



大阪大学の卒業式で両親と

日本語スピーチで優勝

朱さんは中国・江蘇省の、南京にほど近い丹陽という町の出身。5歳の時に山東省済南市に移住し、外国語教育に重点を置いた中高一貫の名門進学校に入学した。「本来学費も合格の倍率も非常に高い学校なのですが、入試得点の上位92名は入学金が無料。幸運にその枠で合格しました。それ以来、日本語が第一外国語です」

高校2年の時に中国全土を対象とした日本語スピーチコンテストで優勝。賞品としてもらっ

た日本旅行で京都・大阪を訪れた。京都大学の百周年時計台を見て強い印象を受け、上海外国語大学時代には、国費留学生として1年間京都大学で学んだ。卒業後、本格的な日本留学をめざした。初めは京都大学を考えたが、「大阪大学の方が、入試時期が早かったのです。それで、力試しのつもりで受験したら合格。雰囲気がよかったです。そのまま大阪大学に入学しました。今では大阪大学に入って本当によかったと思っています。経済学研究科では相談室の方も教務係の方も、すごく親身になってくださいました。今回は自費留学だったため、アルバイトの紹介や奨学金の情報提供などが、とても心強かった。

経済学研究科では小林敏男教授のゼミで経営学を学び、「中国における日経流通企業の現地化」を研究テーマとした。「さまざまな企業が中国に店舗展開していますが、必ずうまくいっていません。そこで、どこをどう改善したらよくなるかを研究しました。小林先生は厳しい方でしたが、この研究を応援してくださって、おかげで北京や成都の大手流通企業の店舗で現地調査を行うこともできました」。朱さん自身がアポイントをとり、教授や大学院の先輩と一緒に調査旅行したことが、よい思い出だ。

「会社を好きな気持ちは負けない」

そのまま博士課程に進むつもりだったが、小林教授に「キミは就職したほうがいい」と助言されたのが、大きな転機となった。経営学を学び、日本語に堪能な朱さんに注目したある企業人が、京阪電鉄でのアルバイトを紹介してくれた。海外事業を展開したい京阪電鉄が、中国をはじめ外国人観光客を誘致しようとしていたのだ。その仕事ぶりが評価され、京阪電鉄に、初の外国人総合職正社員として登用された。

朱さんが入社した2011年、京阪電気鉄道は開業101年目を迎えた。「会社の節目の年に、私は初の外国人正社員として入った」。観光事業を重視し、インバウンドの拡大を戦略の一つに掲げる京阪電鉄。その事業推進を担う



福娘として選ばれた豊中えびす祭

経営統括室が、朱さんの職場となった。

外国での就職。しかも老舗の大企業であるだけに、会社独特の仕組みなど、分からない点もあると感じる。「多分、私の考え方や行動が周りと違うことがあり、特殊な存在だと見られているでしょう。でも、会社を好きと思う気持ちはだれにも負けません」。中国にも「石の上にも三年」に当たる言葉があるそうだ。「日本にいる限り、私は京阪人。会社のやり方をきちんと理解し、成長したいです」

「京阪恵子」名で中国語ブログ

2012年から一般公募になったイメージキャラクター「おけいはん」にも応募するほど京阪好き。残念ながら、書類選考で落選した。現在はブロガーとしての活動に力をいれ、公式に「京阪恵子」の名前を使って中国語で発信している。京都を中心とした京阪沿線の観光地めぐりの方法や歳時記などを事細かに紹介し、フォロワーとの相互交流を深める。「中国では、旅行に関する情報収集の手段はインターネットが圧倒的。そして、人々が求めるのは、オリジナル性の高い具体的な情報です。台湾にはパワーブロガーがいて、日本旅行でどこに行くかを決める時、その影響力はとても大きい。

地元に住んでいる優位性を生かし、それに負けないように独自で新鮮な情報を掲載していきたい」

最近では、ブログを見て、旅した人から、「恵子ちゃんのおかげで、素敵な時間を過ごせたよ」という書き込みや、「紹介のあったお店には、子供連れで行けるかしら」という質問も寄せられ、手ごたえを感じている。そのようなアクションにも丁寧に対応している。中国から訪れた観光関連企業や旅行雑誌の編集者を、京都観光に案内することも多く、忙しい毎日だ。

朱さんには、会社に感謝していることがある。入社当初に住宅を借りる際、いろいろ理由をつけて入居を断る大家が多かった。苦労の末、会社に保証人になってもらってようやく居を定めることができたのだ。さらに「これからは、外国人社員が住宅を借りる際、個人の名義ではなく会社として借り上げる」と言ってもらえたのだ。「気持ちがとても楽になりました」

アイデンティティをなくさぬように

「長く日本に在る間に、私も変わってきました」と語る一方で、朱さんは中国人としてのアイデンティティも大切にしたいと感じている。「日本に馴染まなければならない、しかし完全に日

●朱 晓斐(しゅ ぎょうひ)氏 2011年大阪大学大学院経済学研究科博士前期課程修了。同年京阪電気鉄道に入社。経営統括室に勤務。通訳案内士、国内旅行業務取扱管理者の資格を持つ。

本人と同じ思考になってしまっはいけない、とも思ふんです。中国と日本の両方の意識や問題をタイムリーにとらえられなくなったら、私のアピールポイントはなくなってしまうでしょう」最後に、外国で長く暮らす経験者として、世界に出ていく若い人へのアドバイスを尋ねると、「先入観をもたないで挑戦してほしい」という答えが返ってきた。そして日中友好に自分も努力する姿勢を示しながら、「日中間にはいろいろなバイアスがあるけれど、中国人は人をベースにものごとを考え、人を財産と考えます。本当の友だちができると思いますよ」とほほえんだ。

企業情報

京阪電気鉄道株式会社
明治39年11月19日創立。運輸業のみならず、不動産業、流通業、レジャー・サービス業など約50におよぶグループ会社とともに、京阪グループを形成。会社創立100年を迎えた平成18年(2006年)11月には、京阪グループの将来像である京阪グループ経営ビジョン「選ばれる京阪」への挑戦を発表した。「人々の暮らしを支え、よりよくすることを使命として、もっと多くのお客さまから選ばれる価値ある京阪グループを創造」することを基本方針としている。

Alumni Interviews
OSAKA UNIVERSITY

2014年3月発行
大阪大学ニューズレター63号 掲載
人物登場 OB・OG訪問 より



「変人力」発揮しイノベーションまい進

チェンジ・リーダーとして逃げずに現場にいてこそ、社員が信頼

日本マイクロソフト株式会社 代表執行役 社長
樋口泰行 *Yasuyuki Higuchi*

日本マイクロソフト株式会社の代表執行役 社長として、ソフトウェア会社からさらにクラウドサービスや自社製タブレット「Surface」等の機器類などにも事業を拡大させている樋口泰行さんは、大阪大学工学部出身。経営危機に陥った総合スーパー「ダイエー」を見事に再建したほか、さまざまなトップ企業の変革者として、実際は苦難や悩みにさいなまれる時期を数々乗り越えてきた。社員たちにも温かい眼差しを送りながら、人間味をさらけだして今も前へ歩み続けている。「ポジションだけのリーダーは2流、3流。人間力が不可欠なんです」と話す。

ユニークな同級生、先輩との出会い

兵庫で生まれ、奈良で育った樋口さんは、「親戚など周囲がほとんど理系だったので」自然と工学部に入学。「勉強らしいことはしなかったなあ」と謙遜するが、当時の同級生は「まさかあんなすごい会社の社長になるとは思わなかったけれど、頭は良かったし、企画力や指導力がありましたよ」と振り返る。

軽音楽部を通じて他大学とも交流でき、幅広い人間関係につながった。「一丁やったらか」と意欲満々の先輩から刺激を受けたり、面白い人間性の人たちと出会えたことが、後の財産となる。「一方で、単に学校と家を行き来するだけの学生もいて、そんな生活だけはしたくなかったです。少し語弊があるかもしれないが、偏差値の高い学科ほど面白くない人間がいたように感じましたね」と語る。上下関係



電子ビーム第2部門 裏研究室

から規律を身につけ、ユニークな先輩たちからパッションを学び取った。

MBAが経営者への転機

電子工学科電子ビーム第2部門で研究したのち1980年に卒業、松下電器産業株式会社に入社。主に溶接部門で働いていた約10年後、技術者から経営者に転身する大きなチャンスが訪れた。社費でハーバード大学経

営大学院に通えるようになったのだ。難しい試験を突破した上、十分な睡眠も取れずに猛勉強し、身も心も削るほどの苦勞をした。成績はもとより、授業で積極的な発言をしなければ、脱落する。「もともと、控えめにふるまうよう、日本的な家庭で育った」樋口さんは、主張しコミュニケーションを取れる姿勢にチャレンジ。教室に入るたび、ほっぺたをたたいて「お前はアグレッシブだ、発言できるんだ」と自らを奮い立たせた。

MBA取得後、より広い世界を求めて松下電器を退職。コンサルタント会社、アップルコンピュータを経て、コンパクトコンピュータに入社し、それと合併した日本ヒューレット・パカード(HP)でも経営の手腕を発揮して、代表取締役社長に就任。ここでも業績を上げて社員の信頼を集めたが、さらに新たな岐路が待っていた。産業再生法が適用されるダイエーの再建を依頼されたのだった。

死闘乗り越えダイエー再生

それまでのIT関係と全く分野の異なる流通業。カリスマ経営者の作った企業を再生させるという難しい仕事。HPへの愛着。迷いに迷い、多くの知人にも相談するなどして、受諾を決断した。2005年、ダイエー代表取締役社長に就任。僅か1年半で見事に再生を成し遂げただけに、一つの成功物語のように受け止められがちだが、「眠られない、食べられない。まさに死闘で、体重が8・落ちた」といい、その「499日間の苦闘」を中心に、著書「変人力」(ダイヤモンド社)に記している。

そのユニークなタイトルは「大きな変革を行うためには、揺るぎない軸をもって社内の固定観念を打ち破る力、社員たちに熱き言葉で信念を伝える力が必要だ」という思いから。周囲に反対され、変人と見られることも覚悟して、チェンジ・リーダーになりきった。外部から登用された社長だけに、生え抜きの幹部たちは「お手並み拝見」というようなムードも醸し出したが、さまざまな社長直轄プロジェクトを立ち上げるなどして、変革を進めた。その象徴的な一つが「野菜の鮮度向上」プロジェクト。当時のダイエーは、野菜が悪いというイメージが消費者にこびりついてきたが、組織として改善できない状態だった。各セクションから意欲的な社員を集め、社長も加わって積極的に意見を戦わせ、流通ルートの見直しなどを加速的に進めた。見違えるような品ぞろえとなり、かつては



ダイエーのイメージを刷新した「野菜の鮮度向上」プロジェクト

野菜の裏など傷み具合を見ていた客が、いちいち確認などせず買い物かごに入れてくれるようになった。

リストラも社員を思えばこそ

それでも、組織のリストラは「会社と社員のことを思えばこそ」、避けて通れなかった。全国263店舗のうち、54店舗を閉鎖。ここでも、樋口さんの人間性がにじみ出る。その1店ずつに向かい店長、店員らと向き合った。「こんなに頑張っているのに、なぜ閉めるのか」と訴える女性に、言葉が詰まった。まさに閉店シャッターが降りる時、90度お辞儀をして肩をふるわせる社員の姿に、涙があふれた。「リーダーたる者、最後まで逃げてはいけない。つらい現場に行かない、きつい仕事をやらないようでは、リーダーは従ってもらえない」との信念を、まさに現場で貫いた。

腹落ちが会社のパワーに

著書には「腹に落ちる」という言葉が何度も出てくる。社員ととことん語り合い、納得してもらったうえで、やっと変革の道を進めるとい思いがあるのだ。「腹落ちさせれば、社のパワーになるのです」

今、日本マイクロソフトのトップとして、再びITの世界でイノベーションの道を突き進んでいる。企業は成功すると慢心しがちだが、マイクロソフトは常に進化に対する危機感を持っていると自負する。「ITは今後も時とともに重要になり、それとともにライフスタイルもワークスタイルも変革されていく。当面はデバイスをますます

ポジションだけのリーダーは
2流、3流
人間力が不可欠なんです

樋口泰行

●樋口泰行(ひぐち やすゆき)氏
1957年兵庫県生まれ。80年大阪大学工学部電子工学科を卒業し、松下電器産業株式会社入社。91年ハーバード大学経営大学院卒業、92年ボストンコンサルティンググループ入社、94年アップルコンピュータ株式会社入社。97年コンパクトコンピュータ株式会社入社。合併を受け2003年日本ヒューレット・パカード株式会社代表取締役社長、05年株式会社ダイエー代表取締役社長。07年3月に日本マイクロソフト株式会社代表執行役 兼 COOとなり、08年4月から代表執行役 社長。

進化させていきたい。日本マイクロソフトを日本に貢献できる会社として育て、そして日本を刺激する存在にしたい。それが私の夢です」

何でも一生懸命やれば身につく

母校にも温かい目を向け、多忙なか講演などで何度も来校し、本社内でも大学院生と議論の機会を持った。「2大経済圏の一つにある大学として、グローバルに活躍できる優秀な人材の輩出はもちろん、超域人材のようなマインドも含めた教育をしてほしい」と期待を込める。そして後輩達にも「勉強だけでなく、遊びでもなんでも一生懸命やれば、それが多様であればあるほど成長につながる」と呼び掛け、IQ(知能指数)の高さよりも、EQ(感情指数)の高い人間を重んじる。「学生時代だけに限らず、悩んで苦しむことが人間を成長させる。苦勞、下積みを経験することが、人間の幅につながるんです」との言葉を、自ら実践し続けている。

●本学学生との対談の様子

超域 大阪大学 樋口社長 検索

超域生が、樋口社長に聞く
～リーダーに必要なものは何か?～
<http://www.cbi.osaka-u.ac.jp/activity/113.html>

企業情報

日本マイクロソフト株式会社

1986年2月設立。事業内容は、ソフトウェアとクラウドサービス、デバイスの営業・マーケティング。2011年日本法人設立25周年を機に、「日本に根差した、日本の社会から信頼される企業」を目指し、本社を東京都品川区の「品川グランドセントラルタワー」に移した。資本金4億9950万円、従業員2225人、平均年齢39.8歳。

仏の「心」に向き合いながら 友禅画の世界に表現の道求め

友禅画家 あだち幸 Sabi Adachi



●あだち 幸(あだち さち)氏
本名 尾立幸枝(ゆきえ)。1944年、岡山県井原市美星町生まれ。大阪外国語大学英語科卒業。友禅染作家の5代田畑喜八氏に学ぶ。画集「白の幻影」(法蔵館)、「白い憧憬」(学研出版)ほか2013年には集大成「ほどけへの憧憬」(日貿出版社)発刊。12年パリのソシエテナショナル・デ・ボザール展に日本代表として招待出席。詳しくはwww.ibara.ne.jp/~adachi-m 参照。

伝統の友禅染に独自の技法を加えた「友禅画」を描く画家、あだち幸さん。人間の内の苦悩や慈しみ、仏の「心」に向き合い、染めと画を融合させた世界に表現の道を探り続けている。2007年には京都・壬生寺に障壁画を奉納。「すべての命の共存共栄のために、今こそきらめく才能を結集し方向性を見さだめるとき」と、自らの芸術活動について語ります。

苦悩の末に独特の画法

友禅画は、上質の絹地に染料を重ね、貝殻からできる白い顔料、胡粉でぼかしを入れる、あだちさん独特の画法。あえて分類すれば「京友禅の手法を基本にした日本画」といえる。20以上の複雑な工程で成り立つ友禅染は、多くの職人の分業により完成するが、あだちさんは「蒸し」「水洗い」など一部を業者に委託するほかは、図案作成から細く輪郭を描く「ゴム糸目」、彩色、仕上げまでほとんどの作業を一人で行う。

大阪外国語大学で英語を学んだあだちさんが、友禅画家として歩み始めたのは42歳の時。友禅画にたどり着くまでには、納得できる「何か」を見つけあぐねた苦しい時期もあった。

キャンパスで知り合った3歳上の足立勝さん(ロシア語科卒業)と大学卒業1年後に結婚。商社に勤め海外勤務もある勝さんとの生活は、互いの自由な時間を尊重するというものだった。仕事に奔走する勝さんに対し、あだち

さんには打ち込める仕事も趣味もなく、「何者でもない自分」が不甲斐なかった。京都の自宅と故郷の岡山県井原市美星町を行き来する暮らしの中で、父の親友の院展作家に日本画を習ったり、水墨画を手がけたりしたこともあったが、静物写生や決められた構図を描く絵には馴染めず、続かなかった。ただ「何かを表現したい」という欲求は絶えずありましたね」と振り返る。

追い求めて仏教本に傾倒

やがて勝さんの転勤に伴い、東京に転居。「何かになりたい」「自分の手で収入を」と模索は続き、大学で学んだ英語を生かそうと翻訳の専門学校へ通い猛勉強した。下訳を任せられるまでにはなったものの、仕事と東京の生活が重荷となり始める。星が輝く緑豊かなふるさとで、小さな生き物や草花に心を寄せながら育ったあだちさんには、大都会での日々は耐えられないものになっていた。この頃、救いを求めて仏教や哲学の本を読む中で芽生えた仏への「憧憬」が、のちに描く仏の「形象」

へとつながっていく。

勝さんが転勤を申し出て2人は京都へ戻り、ふるさとのあたたかさにもふれて、あだちさんは心の落ち着きを取り戻す。そんな時、友禅染を体験できる市民講座に参加したのが転機となる。袱紗などの小物作りは楽しく夢中になった。さらに、ふと「仏様のお姿を描きたい」と湧き出た思いを形にしたのが、友禅画家への第一歩だった。勝さんの実家が京都市内で呉服商を営んでいるつながりから、京友禅作家に師事。あだちさんの独自の画法は注目され、87年には京都クラフトセンターで初の個展「ほどけたち」を開き、その後、関東や関西、故郷の岡山などでも作品展を開催した。

壬生寺に障壁画、ふすま絵奉納

89年に京都・壬生寺の千体仏塔に観音画を奉納した縁で、本堂の障壁画とふすま絵を手がけることになり、4年がかりで完成させた。本尊の三方を取り囲むふすま8面と壁面6面



京都・壬生寺本堂の障壁画とふすま絵

描くことで一隅を照らし
魂に響いて共感の和を広げ
利他の行動に結び付けてくだされば



壬生寺障壁画の制作風景

(高さ約2.7メートル、全長約30)に、現世から極楽浄土へと連なる命の永遠性、平等、平和への願いを表現した大作だ。

「弱いものが虐げられ、人間中心の論理が自然や人心を汚染する現実を前に、自分のあまりの非力に感えます。そんな私でも、描くことで一隅を照らし、どなたかの魂に響いて共感の和を広げ、絵を見られた方が利他の行動に結び付けてくださったら、これ以上の喜びはありません」と語る。また「無数の語学の達人なくしては、文明の興隆もありえなかったことを思えば、語学に習熟することによる可能性、使命は無限」とした上で「それでも言葉では伝えられないものがあり、それを図像で表すのが曼荼羅」ととらえる。

「才能満ちあふれる阪大」

高校で英語が得意だったので選んだ英語科は「(大阪外大に)入学してみると、周りはできる人がいっぱいやる気をなくし、さぼっ

てばかりでした」と笑う。とはいえ、当時のノートを繰れば、「良寛研究の東郷豊治先生の心理学や、甲元健雄先生(英文学概論)の東洋と西洋の文明の違いについての授業などは、今思えば、現在の私につながる大事なことを教えていただいていたのだなあとわかります」。統合で大阪大学外国語学部となったことで「語学の修練のみならず、総合大学ならではのさらに豊かな学びが大切にされるといいですね」と期待する。

「今まさに、あらゆる生命の共存共栄、循環型社会を目指し、方向性を見きわめる時にきています。各分野にきらめくような才能が満ちあふれている大阪大学の力を結集すれば、科学を敵にすることなく世界をよい方向に変えていけるはずだと、ワクワクしているのですよ。『世界でトップ10の研究型総合大学へ』とのことですが、ナンバー1、オンリー1も目指せるのではないのでしょうか」



「観音の心」



●大嶋 明(おおしま あきら)氏
1953年大阪府生まれ。76年大阪大学工学部建築工学科卒業。78年工学研究科建築工学専攻修士課程修了、80年カリフォルニア大学ロサンゼルス校建築都市計画大学院修士課程修了。81～85年都市計画事務所、工務店勤務。86年大嶋明建築設計事務所(池田市住吉1)開設。95～2002年大谷女子短期大学(現大阪大谷大学短期大学部)、98～07年四天王寺国際仏教大学の非常勤講師。

Alumni Interviews
OSAKA UNIVERSITY

2014年6月発行
大阪大学ニュースレター64号 掲載
人物登場 OB・OG訪問 より

設計はデザイン性に走らず 実用性を重視

知識より知識の使い方を学ぶことが大事

有限会社大嶋明建築設計事務所 代表
一級建築士 大嶋 明 Akira Osbima



建築工学科(1976年卒業)の同窓仲間と

大阪大学豊中キャンパスの西側、国道171号沿いに建つ大嶋明建築設計事務所。代表の一級建築士、大嶋明さんは大阪大学の工学部、大学院、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)で建築や都市計画を学び、帰国後は工務店での現場仕事を33歳で独立した。以来30年近く、主に住宅や医療施設、店舗の設計をしてきたほか、飲食店4店の経営者の顔も併せ持つ。自らデザインシオナーを務めるカフェレストラン「NUー(ニュー)」(池田市)で快活に語った。

地元石橋に「アンテナショップ」

阪急石橋駅東口から歩いて3分、阪大豊中キャンパスへの道沿いに、蔦が印象的なカフェ「NUー」はある。広くとったガラス戸と窓を通して、学生らが行き交う通りと中庭が見渡せ、植物の緑と木の風合いが南国のリゾート地を

思わせる。「私の隠れ家です」と言いながらも、「実際は店のみんなが働いている時に、社長が来て飲めませんよ」と苦笑する。自社事務所の「実践的なアンテナショップ、基本コンセプトを提示する場」として開店した。目指したのは「自分にとって居心地のいい、飽きのこない空間創り」。流行や装飾といった要素から離



れ、自然素材やシンプルな色、形で落ち着きや統一感を打ち出している。

父母の影響で建築の道へ

建築家を志したきっかけをこう語る。「美術が好きだったんです。幼い頃から絵画教室に通っていましたが、中学、高校時代は美術部。おふくろも友禅染など創作活動が好きで、その影響もあると思います。頭は理系で、ち密な計算が得意。それで建築デザインが好きな道になりました。」「鶏口となるも牛後となるなかれ」という父からの言葉も意識の中にあり、自然に自分の好きなことで身を立てる意志が育っていた。東京の大学に行きたい気持ちもあったが、第一志望である阪大建築工学科に。生まれ育った池田市から吹田キャンパスに通った。

あこがれの建築家慕って米留学

阪大での学部生時代は、美術部での思い出が懐かしい。「体育会系みたいで上下関係にもまれ、けっこう面白かった。和具(三重県志摩市にあった臨海学舎、既に閉舎)で合宿し、1年生が海に潜って貝を採り、2年生が洗って3年生が調理して、4年生が食べるんです。女子大との合コンもあり楽しかった。勉強はちょっとして、それでもそこそこの成績はとっていましたね。要領はいい(笑)」

大学院修了後は、当時好きだったポストモダンの建築家チャールズ・ムーア氏が教えていたUCLAに留学。大嶋さんにとって氏の魅力は「おもちゃ箱をひっくり返したような楽しいデザイン」。「真四角のビル、ガラス張りといった近代建築とは少し違う、歴史を感じさせるような人間らしい建物を作る先駆者」にひかれたと

いう。

建築家の哲学磨く

帰国後は都市計画の事務所で団地の計画や再開発などの仕事に携わった後、工務店に勤務。木造、コンクリート、S(鉄骨)造の現場を順に経験する中で「業者さんとも仲良くなり、後に事務所を開いてからも『どうしたらええん?』などと聞けるルートができ、お世話になりました」。建築現場の実情を知ったことで、良くも悪くも「常識的な判断」が身に付いたという。デザイン性に走らず、建ってから後のことを見据えて採算や実用性を大切に地道な設計のあり方が、その後の大嶋さんの基本姿勢となった。「建物は残る。最後まで面倒をみるのが建築家の社会的な責務」と考える。

「ビフォーアフター」出演も

10年ほど前には、建築家の知恵で家の悩みを解決する朝日放送のテレビ番組「大改造!! 劇的ビフォーアフター」に出演。狭い土地に建つ住宅のリフォームなどを手掛けた。これまでさまざまな注文、要望に対応する上で自ら大切にしてきたのは「自分の能力を120%に高める」努力。そうすれば余裕を持って勝負できるという、それを若い人も求める。また、大嶋さんにとって、建築の居心地の良さは意図して作りだすものではない。「工芸と一緒に、積み重ねた経験と感性をもとに、普通にやった結果生まれるものが本当に素晴らしい」

自身を称して「向こう意気が強いし、筋が通らんことはビシッと切ってしまう。面白いものには早く飛びつき、アカンと思ったら逃げ足は速い」と笑う。施主とけんかになったことも一度な

建物は残る
最後まで面倒をみるのが
建築家の社会的な責務

大嶋明

らずあるそうだ。「でも意外に、その後でかえって仲良くなったりしましたね」

「古き良き日本」がある タイへ拠点移す

ここ数年は、友人を通してタイとのつながりを持ち、近い将来、同国に拠点を移しての飲食店プロデュースなど新たな計画が進行中だ。「タイは古き良き日本を思い起こさせ、人情味がある国。誰か1人が頑張ると周りの10人が幸せになる。対して日本は縮小社会で、1人が富を蓄積すると周りに困る人が出る。その違いは大きい」。今という時間と場をゆつたりと楽しむタイの人たちの中で仕事をする生活設計を描いている。

知識より、その使い方学べ

経営する「NUー」が所属する飲食店の組織「石橋下町倶楽部」の活動を通じ、意欲的で活発な阪大生と接する機会も多い。一方で、一般的に最近の若い人たちについて感じるのは、あふれる情報を選択し判断する力が乏しく、できないことから逃げるひ弱さだという。以前、私立大学で教えていた頃も、学生には「正しいとされていることをまず疑ってかかきなさい」と助言していた。一方、学校側に対する助言として「知識を詰め込むのではなく、知識の使い方を教えてほしい。サッカーで言えば、『最初にルールを教えてどないすんねん。とりあえずボールで遊ばせよ』と。使い方がわかれば次のステップで知識はどんどんついてくる。知識の使い方は人によって違い、体系だって教えるのは難しい。でも無難な道を変えていかないと。後輩を温かく、時には厳しく見守っている。



●大石佳能子(おおいし かのこ)氏
1983年、大阪大学法学部卒業。日本生命を経てハーバードビジネススクールでMBAを取得。88年マッキンゼー・アンド・カンパニーに入社、パートナーにも就任。退職後、2000年に株式会社メディヴァを設立、代表取締役社長を務める。06年「日経ウーマン・オブ・ザ・イヤー」受賞。

オフィスを癒してくれるセラピー犬のルイ君

医療界を患者視点で革新、価値創造

「お互いさま文化」で働きやすい環境も

医療コンサルタント
株式会社メディヴァ代表取締役社長
大石佳能子 Kanako Oishi

「患者さんの視点に立って医療界に革新と価値創造をもたらしたい」と、2000年に株式会社メディヴァを設立した代表取締役社長の大石佳能子さん。米国で取得したMBA、マッキンゼーなどでのキャリアを生かし、医療機関・介護事業の経営コンサルティング、オペレーターを全国で展開している。両親が大阪大学法学部の同級生、自身も法学部の卒業生。阪大法学部の「申し子」のような女性だ。実業界で活躍し政府の公職も務める一方、社員たちには「お互いさま文化」の中で家族を大切にすることを奨励し、子育てなど働きやすい環境を整えている。

社会で役立てる人間になりたかった

在学中を「まじめな学生ではなかった」と振り返るが、法学部の単位だけでなく経済・経営の授業も積極的に受けていた。「早く社会に出て、役に立てる人間になりたかった。だから、実学重視の阪大が私には合っていたんですよ」。卒業直前の1983年2月にはヨーロッパを40日以上放浪し、ゼミの川島慶雄教授(国際法)が「卒業生総代に決まったよ。式に出られるだろうな」と心配したエピソードも披露。

MBAを取得しマッキンゼーの役員まで

日本生命に就職したものの、男女雇用機会均等法成立前で、女性には「コピー、お茶くみ」のイメージがついていた。試験を受けて女性総合職第1号となったが、知人の勧めなどもあって、米国ハーバードビジネススクールで学び直した。授業前に1日3ケースの事例を学んでおかねばならず、自習だけで「3時間×3」。寝る時間もない日々。父の仕事の関係で小中



マッキンゼー時代のオishiさん(最前列左端)。アジア・オセアニア地区の支社のマネージャーが集った会議(1991)

学校を米国で過ごし、阪大でもESSで語学力は鍛えられていたが、ハーバードの授業は厳しかった。ケースディスカッション重視で、当てられるたびに自身の意見をスピーチする積極性が求められた。

MBA取得後、28歳でマッキンゼー・アンド・カンパニー(米国、日本)に入社。実力と個性を發揮して、パートナー(役員)に抜てきされた。「私は、課題の設定、チーム運営、クライアントへの対応が得意で、やる気をもって楽しく仕事できる環境を作れたのが評価されたのでしょう」

出産が転機に。「病院を良くしたい」

36歳で長男を出産したことが、大きな転機となる。病院で、特別悪い扱いを受けたわけではなかったけれど、病院のあり方に疑問をもった。例えば、診察までの長い待ち時間だ。銀行なら、時間のかかる融資交渉とすぐに済む預金引き下ろしは別のルートで行い、待ち時間を削減しているが、病院ではいろんな症状の患者さんが同じルートに乗せられている。それが「当たり前」とされていた。

医療界に新風を吹き込もう。マッキンゼーにいた医師と一緒に2000年、「メディヴァ」を興し、第1号クライアントとして用賀アーバンクリニックを設立した。以来、かかわった医療施設は120~130にもものぼるほか、病院の再生、健保組合の赤字解消、ミャンマーでの医療支援など幅広い活動を展開する。患者さんの視点を重視し、診察時間を午前8時~午後8時に設定したり、カルテの開示を行ったり。「同じ5分間診察するにしても、パソコンばかり見ているのではなく、患者さんの目を見て触診することで、患者さんは満足できる。最後に『ほかにご質問はありますか』と医師が尋ねることによっても患者さんの満足度が上がります」と説明する。医療報酬には複雑な点数制度があるが、いろんな診療科をうまく乗り入れることで、経営効率も上がる。患者さんに認知してもらえれば、口コミで「いい診療所だ」と広まるのだ。

安心して出産・育児のできる職場に

メディヴァ内では、出産・育児を経ながら働ける環境を整備している。子どもが熱を出しても、自宅にパソコン1台あれば看病しながら仕事をこなせる。仕事のチームでも融通し合う。職場に子どもを連れてきて構わない。大石さんは、社会、職場に昔ながらの「お互いさま

子どもたちには「君たちに、住みやすい社会を作っていく」と言える大人でいたいんです



別荘がある葉山で長男アキ君と(2002)

なんて応えたくない。「君たちに、住みやすい社会を作っていくためだよ」と言える大人でいたいんです」

「自分の力をどれだけ磨くか」

阪大の後輩たちには「同じ人生を歩むなら、やりたいことをやってみなさい。これをやっちゃいけない、こんな格好悪い、なんていう考えは捨てて、自分のエネルギーをいっぱい発揮したらいいんです」と呼び掛ける。「マッキンゼーなどにいた阪大出身者も、一生懸命取り組む姿勢を持っていました。マッキンゼーでは、仕事を回す能力に長けた人間を「street smart」と表現します。阪大出身者にはこういう方が多い気がしますね」とも。また自身の経験も語ってくれた。

転職などの転機が訪れた時、どう判断するか。「あっちの水が甘く思っても、それに惑わされないように。今の組織だからやられている場合もある。自分の力を過信せずに、よく見つめ直してから道を決めてください」

日本の社会はまだ、女性が実力を発揮しづらい。「女性は損だ、なんて考えても仕方ない。レアであるからこそそのメリットがあることも。得意な分野、才能をどんどん伸ばしたらいいんです」

箕面に実家があって、「大阪人」を自認。「物怖じしない積極性がとても大事で、大阪人のDNAは世界に通用しますよ」と笑いながら、「最後は、自分の力をどれだけ磨いてきたかです」と力強く結んだ。



文化」を再生させようとしているのだ。家族会を作って親睦を図るほか、顧客との懇親会を催せる「宴会スペース」の隣には、子どもが遊んで待っている空間も。約100人いる男女社員には、月1人くらいのペースで子どもが生まれている。そして若い人も「子どもがほしいな」と考えるようになってきているという。

社員には、ワークライフバランスの取れた仕事ぶりを求める。原則として深夜までとか徹夜の勤務は禁じ、効率よく働くよう指導する。1週間1人で考えるより、1日考えてから周囲に相談する方がいいと話す。

企業には「NPO的」な体質も

企業である以上、利益追求は大事だが、それに固執せず、「NPO的」な体質を大切に考える。「子どもから『どうして働かないといけないの?』と尋ねられて、『お金を稼ぐため]だけ

企業情報
株式会社メディヴァ
MEDIVA=Medical Innovation and Value-Added。本社は東京都世田谷区用賀2。資本金1億5800万円。事業内容は、医療機関・介護事業の経営コンサルティングとオペレーター、健保・人事のコンサルティング、ヘルスケアサービスの開発・運営など。社員は、医療やコンサルタントとは無関係だった職種から転職してきた者が多く、率直でユニークな意見が交わされている。
2014年から新卒社員の募集も開始している。
Eメール=contact@mediva.co.jp



Alumni Interviews
OSAKA UNIVERSITY

2014年6月発行
大阪大学ニュースレター64号 掲載
人物登場 OB・OG訪問より

住吉は我が町
夢の原点

特別企画
OB訪問
平野俊夫総長
住吉編



●平野俊夫(ひらの としお)
1947年大阪市住吉区安立(現表記は住之江区)生まれ。市立安立小学校、同住吉中学校、府立天王寺高等学校へ進学。1966年阪大医学部入学。中学では天体観測、高校ではバイオリン、部活はハイキング部。大学では医学部山岳部に所属。富士山以外の3000m級の山はすべて登頂。休日はスイミングなども。趣味は音楽鑑賞と読書。愛車のオーディオでたまにドライブも。総長職が多忙で、なかなか時間が取れないのが残念という。

淀君が奉納したと伝わる太鼓橋



奉納書籍類を収めた御文庫



住吉津の高燈籠(写真は復元後のもの)



一寸法師になった気分?で權を漕ぐ

大阪は住吉津から世界につながった

すみのおのつ
みおつくし
住吉大社は「世界適塾」に通じる潯標

「24時間、大阪大学のことを考えている」という平野俊夫総長。ではいつ休むのですか?と尋ねたくなる。たまの休日ふらりと訪れた住吉大社で束の間のリフレッシュを楽しむ。仕事や大学では見られない普段着の姿がありました。



高井道弘宮司(中央)、安立小学校後輩の高野伸生さん(左から2人目)らと

「住吉」は住吉さんとともに栄えた町

南海本線住吉大社駅を降りると目の前が住吉大社。その鳥居から西約400m、国道26号と交差するあたりに、巨大な高燈籠がそびえる。かつては、ここから海が広がっていて、神功皇后の孫、仁徳天皇が造った津(港)の目印だった。ここら一帯の海岸沿いに松がずっと続いて、白砂青松の歌枕の地として、万葉集などにもよく詠まれた。

平野 「住吉大社は、古事記・日本書記によると、神功皇后摂政11年すなわち211年に創建されたとあるように、1800年の歴史を有する我が国でも最古の神社の一つです。日中交流1400年の長い歴史は、聖徳太子が607年に小野妹子を隋に派遣したことにより始まったとされます。618年に隋が滅びて唐の時代となってからは遣唐使として日中交流の要となりました。この遣唐使・遣唐使は仁徳天皇が開いたとされる住吉津より旅立ちましたが、その旅立ちにおいて、住吉大社で航海の無事を祈ったと言います。このように住吉大社は古来より世界への玄関でした」

平野 総長のガイドを聞きながら大社を目指して住吉公園をゆっくり歩いていく途中、園内で遊ぶ子どもたちに平野総長が目をつめた。
平野 「子どもの頃、この砂場でよく遊んだ

なあ。自宅から徒歩約15分、もっと小さい時は、父が日曜日によく連れてきてくれた。(レリーフの記念碑を見ながら)古代海岸線は松林が延々と続いていました。今でも所々に残っています。(松林で思い出したように)夏には浜寺水練学校にも通っていたこともあります。住吉の松は歌枕として万葉から有名で、近くに万葉の権威、犬養孝・阪大名誉教授(故人)の家がありました」

由緒ある御田植神事や観月祭

鳥居をくぐるとすぐ、目の前に有名な太鼓橋が姿を現す。住吉大社のシンボル、半円形の急な階段を上っていく。

平野 「今は歩きやすくなっていますが、昔は、板の間にすきまがあって下に落ちそうで、子ども心に怖かったです。中秋の名月の日、美しく光る満月の下の太鼓橋で舞楽が披露される「観月祭」は幽玄の世界へと誘います」

石舞台、6月に御田植神事や行われる御田、一寸法師発祥の地のモニュメントなどを見ながら散策。平野総長にとって、公務の疲れを癒す散歩コースだ。緑の少ない大阪で、ここは格好の名所となっている。図書館の起源とされる「御文庫」の前を通った。説明文に「1723年設立」と記されているのに気づいた。

平野 「大阪町人の学問所である懐徳堂の

設立(1724年)とほぼ一緒やったんやなあ。学問の歴史を感じます」

遣隋・遣唐使船にも思いをさせ

ほどなく、大社の高井道弘宮司が出迎えてくださり、社務所で歓談した。大阪を、住吉を愛する気持ちが共通していて、すぐに打ち解けた。高井宮司が「本大社を大事に思っていたらどうか光栄です。逆に大阪大学の総長が住吉から出たことは誇りです」。そして「万葉の時代、住吉は『すみのお』と読みました。平安時代になって『すみよし』と読むようになったようです」と教えてくれた。今では住吉の隣が「住之江」だ。同大社には本宮が4つあることから、

遣唐使船が4隻で構成されたと伝わる。平野 「いつから読み方が変わったのか、疑問に思っていましたが、高井宮司の説明で納得しました。仁徳天皇が開港した津から、遣唐使たちは住吉大社に参った後に世界を目指しました。住吉大社は大阪の宝であると同時に、『適塾』の精神を受け継ぎ『世界適塾』を目指す大阪大学の潯標ともいえます」

今年の大相撲春場所の際、本殿前で横綱の土俵入りが行われたこと、平野総長が二人の孫を抱えて見物したことを話したり、「私の実家のすぐ前を住吉大社の御輿が練り歩くのは勇壮でした」と回顧するなどして、話はますます盛り上がった。



神楽白拍子の舞を特別に披露いただいた

III 社会との交流

III 社会との交流



Alumni Interviews
OSAKA UNIVERSITY

この町を歩くと
なんか元気になります

特別企画
OB訪問
平野俊夫総長
安立編

安立商店街

家族があつて 今の私がある 未来を信じ 夢に向かって突き進む

大阪大学とともに約50年。阪大で学び、日々研究に没頭し、今は大学のトップとして舵を取る。仕事も研究も余暇も常に全力投球だ。そのエネルギーは家族の支えと周囲の助けだという。64号に続き、平野俊夫総長の素顔を紹介します。

古き面影を残す安立の街並み

住吉大社を後にして、鳥居前から阪堺電気軌道の路面電車に乗って南へ下った。
平野 「中学、高校時代もこのチンチン電車^{チンチン}で通学していました。周りの風景は当時とさほど変わっていないなあ」
大和川手前の停留所^{あんり}で下車。この付近が平野総長の生まれ育った「安立町」だ。江戸時代には住吉大社の門前町として発展した。
平野 「江戸初期の良医、半井安立^{あんり}に由来する地名です。庶民のために医術を尽くした人で、適塾を開いた緒方洪庵にも通じます」
格子戸や土壁など古い軒並みが今でも残



お宝のリアカラスのレコード

る。旧紀州街道の名残りだ。子どものころから親しんだ「安立商店街」を通る。「一寸法師」ゆかりの地とのこと。
平野 「昔はもっとお客さんが多かったですよ。当時このあたりではどの家も年末は12月31日まで働いて、それから正月の買い物にかかったから、この商店街は大晦日の夜遅くまで賑わっていましたね」
商店街を抜けて真っ直ぐ北へ進むとすぐ、万葉集にも出てくる「叡松原」の碑文が立ち、母校の大阪市立安立小学校が見えた。
平野 「このあたりに私の教室があったんです。校舎は建て替えられています」
校舎を眺めながら当時を懐かしそうに思い出す。その後自宅に向かった。商店街から続く街道沿いに建つ3階建て。間口はそれほど広くないがかなりの奥行きがある。
平野 「ここで父親が『平野医院』を開業していました。1985年に父親が亡くなって医院は閉じました。私が医学部に進んだのも小さい時から医療の空気の中で育ったからでしょうか、自然と医学の道を志していましたね。特に父親



子どものころから体育は苦手というが、山登りとドライブは別。アメリカ留学時代に車で大陸横断をしたこともある。学会でヨーロッパに行った時もレンタカーで10日間旅をした。最近は愛車のアウディTTでたまにドライブする程度。時間ができたら夫人とドライブ旅行してみたいという。



夫人を横に乗せて

から跡を継いでほしいと言われたことはありませんでした」

「家族を大切に」

奥様の千代子さんは中学、高校の後輩で、一緒にバイオリン教室にも通っていた。
夫人 「結婚した後も夫は研究一筋でした。だから私は結婚当初から受験生の母親のようでしたよ(笑)。仕事一途でしたが、2人の娘や両親、家族みんなを大事にしていましたね。娘が思春期のころ悩むのを見てメールをしたこともありました」
平野総長の家族思い、家庭的な一面が垣間見えた気がした。学生時代から大事にして

いたレコードプレーヤーがリビングに置いてあった。音楽で疲れを癒すという。
続いて、書齋に案内してもらった。村上春樹や司馬遼太郎などの小説に混じり、手塚治虫の漫画本や趣味の雑誌なども並んでいた。
平野 「自動車の運転が好きなので、その専門書なども読んでいます。休日にはよく家内とドライブもしましたが、総長に就任してからはその機会も少なくなってしまいましたね(笑)」
屋上へ上がると、あべのハルカスや遠くに金剛山などが望める。かつて家族でキャンプに使っていたアウトドアチェアなどが置かれていた。
平野 「娘が小さいころは、ここでよく食事しました。今は夕日を眺めながら、じっくり考え事をするのがここです。(離れを指さし)高校生のときに作ってもらったあの離れの屋上で天体観測をしていましたよ」
屋上は平野総長のお気に入りの場所のようだ。最後に、もし総長になっていなかったら、との質問を向けた。
平野 「やはり研究者を続けていたでしょうね」



ここが私の母校です



町会長さんに声を掛けて



槍ヶ岳の寄せ木細工のある書齋



床柱にくぎを打ち父親に叱られたことを懐かしむ



—インタビューを終えて—

恩師・山村雄一元総長の命日(6月10日)に総長に選出された。天命かも知れないと感じたという。山村先生の言葉「夢見て行い考えて祈る」を座右に置き、後輩たちには、「目の前の山を登りきる」「夢は叶えるためにある」とメッセージを送る。7年前、肺がんの手術をしたときに残りの人生を大阪大学のために捧げる決心をしたという。「阪大を世界トップ10」に、その道は険しいかも知れないが、頂を目指して一步一步歩いて行く。それが平野総長の阪大への恩返しなのかも知れない。

III 社会との交流

III 社会との交流

株式会社毎日新聞社

本誌と学内全学ディスプレイシステム「O+PLUS」のメディアミックス企画は、初めての報道機関として、毎日新聞社を「取材」した。学生映像制作サークル「OUT+V」のメンバー4人が、大阪市北区梅田の大阪本社を訪れ、新聞を刷る輪転機を目の前で見学したり、取材活動や新聞制作工程を説明してもらうなどして、報道現場に触れるとともに、文化や福祉などにも関わる新聞社の幅広い事業に接した。

日々の朝夕刊で、侃々諤々の議論

14階編集局では、社会部、経済部、運動部などが壁なしにつながっていて、声を掛け合うだけでも情報のやりとりがスムーズに進むという。その中央の長い机には、夕刊、朝刊ごとに各部のデスクが集まって、出稿予定などを報告。東京など他本社の原稿も含めて話し合い、どの記事を1面トップ、2番手に扱い、どれを運動面、社会面にするか、などの方針を決めていく臨場感にも触れた。出てきた原稿を紙面化するのは、編集制作センター。各面の

取材を通じて
社会に向けての
情報発信
多様な工程
文化や福祉などにも関わり

学生
体感!

毎日新聞社の
使命感!!

担当者が、それぞれのパソコンで記事を編集し、見出しをつけて行く。

一方、2階の展示コーナーでは、約30年前まで使われていた鉛活字が1文字ずつ逆さまになっていることに、学生たちはびっくり。このほか1955年にヘレンケラーが本社を見学した写真、じゃばら式のカメラなど、歴史を示す展示物に見入った。「新聞が届くまで」のビデオを見て、編集局だけでなく広告局、販売局の仕事や地元の販売店を経て、新聞が各家庭に届けられる経緯を学んだ。

外国語学部1年の中野聡美さんは「一つの記事にこれだけの労力をかけ、1面トップから隅々の記事まで、侃々諤々の議論が繰り返されているのですね」と驚いていた。

地域差で締め切り、紙面が変わる

この後、記者31年目の嶋谷泰典さん(83年法学部卒業)が、記者の生活や新聞作りなどについて説明。同じ日の毎日新聞でも、中四国、京都市・神戸市、本社周辺の大阪市など地域によって、「新聞の締め切り時間が最大約4時間異なる」と解説。3年前のサッカーW杯の日本の試合では、最早版ではキックオフすらない時点、最終版では日本の敗退が決まった時点の紙面を示した。このほか、毎日新聞は

記事を紙面化する
編集制作センター



株式会社毎日新聞社
1872年に創刊した東京日日新聞を起源とする、日本最古の日報。88年に発行が始まった大阪毎日新聞は、後の首相となる原敬も社長を務めた。両紙は1911年に合併し、戦時中の43年に東日・大毎の題字が「毎日新聞」と統一された。96年に全国紙で初めて、記事に記者の署名を原則入れるようにし、2000年には第三者機関が報道をチェックする「開かれた新聞」委員会を設置した。編集部門の新聞協会賞を、「旧石器発掘ねつ造」「大相撲八百長問題」など最多の26回受賞している。大阪大学卒業生は、約30名。本誌をはじめ、さまざまな企画を大阪大学と共同で実施している。



(左から)平野さん、藤本さん、中野さん、福満さん、毎日新聞社・嶋谷さん

日々の政治・経済・事件に加え、海外難民の子どもたちの生活・実情などを毎年ルポしている活動や新聞を毎日読むことが学力向上につながり、大学の就職担当教授が「新聞閲読がコミュニケーション力につながり、面接試験でも力を発揮できる」と指摘していることやメモの取り方や原稿の書き方のコツなどを紹介した。

見学の圧巻は、地下5階にある輪転機場。巨大な輪転機が1秒間に28部、1時間10万部のペースで刷り上げ、コンベアなどによって発送場、トラックヤードに運ばれる工程に感嘆の声を上げていた。



世界で唯一、点字新聞を発行

また、点字毎日新聞の編集・制作工程も見学した。点字で印刷した「指で読む新聞」。一般記事の転用でなく、視覚障害関連を専門記者が取材しそれを週刊で発行しているのは、日本で点字毎日だけであり、世界でも例をみないという。同紙の担当者は、点字がつぶれ



全盲の中村京太郎・初代編集長は、1922(大正11)年創刊の言葉として「(前略)盲人に対し、一個の独立せる市民として社会に活動するに必要な知識と勇気と慰安とを与え(後略)」と記し、その強い信念が今も生きる

ないように手作業で折られていることや視覚障害者が全国に約30万人いて、そのうち点字を読める人は1割ほど▽点字は、六つの点の配置だけで各言語を表現していることなどを説明。外国語学部2年の平野美優さんは「目の不自由な人のために、厳しい採算のなかで発行し続けられていることに感動。障害者についての情報をもっと紹介してほしいし、私も発信していきたい」と語った。

「事件取材は、つらいが不可欠」

本社に続いて、事件取材の最前線である同市中央区大手前、大阪府警本部内毎日新聞ボックスを訪問。担当キャップたちから「大阪は事件が多くて、街頭犯罪数が日本一。素早く対応するため、当直者を含めて24時間態勢で警戒しているとともに、捜査状況を追う

先輩に聞く
INTERVIEW

素晴らしい展示会をつくらしていきたい

毎日新聞大阪本社 総合事業局事業部員
藤原 禎恵 さん (2008年 文学研究科修了)

——新聞社の事業を志した経緯を教えてください。

大阪大学文学部で美術史の先生に展示会を薦められたのを機に、日本美術史を専攻し、美術展を手がける仕事にあこがれました。大学院文学研究科を08年に卒業して、毎日新聞社に入社。東京の人事部、事業部を経て、2012年10月に大阪事業部に赴任しました。

——どんなお仕事ですか。

美術館の学芸員などと協力しながら、展示会をつくっていきます。作品の出品交渉をしたり輸送方法を考えたりするほか、こういった客層・年代に会場してもらえそうか予測して、どうい



逆さまの鉛活字にびっくり。昔は「わいを」文字ずつ拾って編集していた

夜回り・朝駆け取材を日々行っている」「事件の現場や遺族取材は、どれだけ経験してもつらい。遺族を訪ねても追い返されるのが大半で、事件取材は基本的に喜んでいただけることはない。それでも、事件の真相や当事者の苦しみを伝えるために続けなければならない」などと、実情を知らされた。工学部2年の藤本紘平さんは「刑事ドラマのような甘い世界でない。事件記者の精悍な顔つきに圧倒されたし、とてもいい経験になった」と語った。

マイクを手にビデオレポートを続けた外国語学部2年の福満真帆さんは「取材の苦勞、えん罪の危険性など、生々しく聞かされてもええ。情報は決して一つから導かれるものではないので、新聞などいろんなメディアに接しながら、自分で善悪、白黒、是非を判断していかなければならない」と締めくくった。



う広報を進めるかなども考え、一つの展示会を開くだけでも、非常に幅広い仕事求められる。美術館側からの要請に応じるだけでなく毎日新聞側からもいろんな提案を出して、皆さんに喜んでもらえる素晴らしい企画を生み出していきます。

——学生時代の勉強が役立っていますか。

美術史を学んでいたのが、展示会にかかわる事業などに生かされています。もちろん、専門以外の学習も役立っています。

——先輩にメッセージを。

学生時代に持った目標・夢と現実とは異なることが多いです。でも大学で学んだことやいろんな経験が、社会では何らかの形で生かされるので、それらを大事にしながらいっしょに学生生活を送ってみたいです。



大阪証券取引所の信頼感!!

学生体感!

Company Visit report 企業訪問

2013年12月発行 大阪大学ニュースレター62号 掲載 企業訪問より

(左から)小野さん、大阪証券取引所・白井さん、平野さん

先物取引の強み生かし アジアNo.1を目指す

市場に24時間、迅速対応

株式会社大阪証券取引所

本紙と学内全学ディスプレイシステム「O+PUS」のメディアミックス企画。今回は金融の町、大阪・北浜の日本取引所グループ大阪証券取引所を訪ねた。取材したのは、学生映像制作サークル「OUT+V」所属の小野京香さんと平野美優さん(共に外国語学部2年)。江戸時代、当時経済の中心であった大阪に設けられた米穀取引所に始まり4世紀近くを経て、総合的な金融市場取引所へと発展した「大証」。東京証券取引所と事業の統合をすすめるなど、将来を見据えた運営へと移行しつつある。24時間休むことなく、企業の信頼性を確保する取引市場の緊張感漂う現場を垣間見た。



株式会社大阪証券取引所
1949年会員組織の証券取引所として設立。前身は1878年からの大阪株式取引所。その起源は17世紀半ばの「淀屋米市」にさかのぼる。1987年国内初の株式先物市場開設。2001年に株式会社に組織変更。13年1月には東京証券取引所グループと経営統合、日本取引所グループ発足。市場デリバティブ取引業務や取引参加者の管理、新商品・新制度の導入、調査研究を行う。04年にできた現社ビルの下層階部分外観と玄関ホールは、1935年建設の旧市場館を保存している。大阪大学金融・保険教育研究センターには「デリバティブ取引とリスク・マネジメント」寄附研究部門を設置し、共同研究・人材交流も進める。現在、大阪証券取引所では、約10名の本学卒業生が活躍している。

「手商い」でにぎわっていた場立ち風景

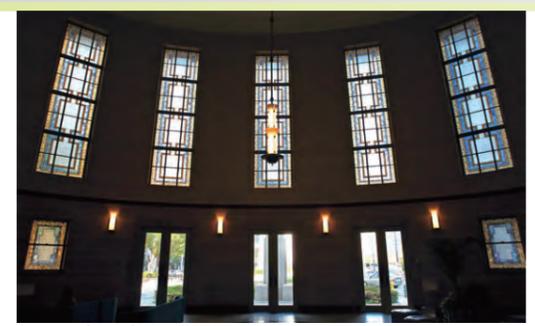


大阪証券取引所前の五代友厚像

新社屋ビルにも歴史を残し

ビジネス街の大阪市中央区北浜1丁目交差点。その南東角に大阪証券取引所はある。重厚な石造りの玄関前には、大阪の街並みを見据えるように、五代友厚像が立つ。「明治時代に大証の前身・大阪株式取引所の設立に尽力し、数々の事業分野で商都・大阪の発展に貢献した人物」と同社広報担当、白井優子さんから教わった。

昭和10(1935)年建築の建物内に入ると、高い天井のゆったりした玄関ホール(アトリウム)は、縦長窓のステンドグラスが美しい。2004年の新社屋ビル建設の際にも取り壊さず残した一角で、「天井の装飾は、縁起がいい小判型になっています」と白井さん。さらに、大



ステンドグラスが美しい玄関ホール



証のロゴマークは打ち出の小槌であることや、「のぼる」や「あがる」にかけて周辺には昔から鰻や天ぷら屋さんが多かったなどの「金運・縁起」をかつぐエピソードを聞かされ、2人は「へえー」と見回していた。

17世紀「淀屋米市」が起源

マスコミ各社の経済担当が詰める記者クラブや、臨時の記者会見場(取材当日は中間期決算発表の真っ最中)のあるフロアを進む。会議室では矢田真博広報課長が、大証の歩みや証券取引所の業務などを紹介。日本での取引所の起源は、17世紀半ばに大阪で生まれた「淀屋米市」とされる。後に「堂島米会所」へ移ってからは、帳簿上の差金の授受による決済が行われ、それが今日の先物取引に引き継がれている。



矢田真博 広報課長

合理化でデリバティブ強化

国内には東京、大阪、名古屋、札幌、福岡の5カ所に証券取引所があり、このうち東京と大阪は2013年1月に経営統合し「日本取引所グループ(JPX)」が発足、7月には現物取引のすべてを東京に集約した。2014年3月には、東京のデリバティブ機能は大阪に移管し、派生商品に特化した取引所へと拡大する予定という。世界有数規模の株式現物市場である東京と、金融派生商品と言われる「先物取引」や「オプション取引」などのデリバティブ取引に強い大阪が補完し合い、総合的な市場取引においてアジアでナンバー1を目指す。

役割は企業への信頼感提供

同グループ東京証券取引所市場推進部の岡野豊課長は「企業は『上場』することのコストを考慮しなければならないが、一方で上場により企業の『信頼感』が高まり、従業員のモチベーションや取引先との関係にもプラスに影響します。企業に『信頼感』を提供する仕事で

あり、上場の勧誘、審査、市場の監視を進めています」と語った。

小野さんも平野さんも「一つの企業が同時に別の市場に上場できますか?」「有望性はあるがエビデンスには欠ける会社が上場するには、どんな審査をされるのですか?」などと徐々に質問。知名度を上げ資金を集める目的で複数の上場を行う企業の例や、上場申請には2期の監査証明が必要で一定の運用期間は必要、などの説明を受けた。

ハンドサインも体験

大証での株の取引は、99年に全面的にシステム化されるまで、体育館のような広い立会場に大勢の証券会社社員らが集まって直接注文する方法だった。証券会社との連絡を担う社員と、カウンターのをばに待機し即座に口頭で注文する社員の間で使われたのが、手で銘柄や数を示すハンドサインだ。岡野課長から「買い」は手のひらを内側に、「売り」は外



ハンドサインを実演する岡野豊 課長

側に、などのサインを伝授された小野さんと平野さんは、さっそく「3千株売り」などのサインを実演し、「手商い」の時代に思いをはせているようだった。

取材の最後は、関係者しか入れない売買室をガラス越しに見学し、市場データを見つめ敏速に対応する職員たちの姿に触れた。平野さんは「起業を考えている友達がいて興味があり、上場の方法などを質問できて勉強になりました」と、小野さんは「普段触れることのない世界を見ることができ、楽しかった。一般の人も見学できるので、皆さんにもお勧めします」と話していた。

先輩に聞く INTERVIEW

日本の企業 広く応援したい

大阪証券取引所 市場運営部 取引管理室 松井 佳彦 さん(基礎工学部卒)

—入社の経緯を聞かせてください。

大阪大学基礎工学部化学応用科学科を卒業後、京都大学の大学院を経て2006年に入社しました。研究分野を生かした就職も考えましたが、「広く日本の企業全体を応援したいな」と考えた時に、大阪証券取引所が目にとまりました。上場は、優秀な会社がいろいろな人に支援してもらってチャンスであり、それを応援してみたいと思い、この職場を希望しました。

—どんなところにやりがいがありますか?

今は取引管理室で、デリバティブの取引をリアルタイムで監視する仕事をしています。銘柄



別に注文数量が表示された注文板を見ながら、突然おかしな数字が現れたら、正しい注文かどうか確認したり、場合によっては取引を止めたりします。先物市場は日本経済全体にも影響を及ぼしますから、誤った方向にいくと大変ですし、その点でやりがいや責任を感じます。1日4交代勤務で、常に監視を続けています。

—学生へのアドバイスをお願いします。
自分ができなかったことでもありますが、分野に関係なく、人と話す機会を大切に、たくさん本を読んでほしい。社会人になると、付き合いも読書も仕事に関連するものに偏りがちになる。また、仕事で外国人と英語で電話することも多く、学生の時に語学力をもっと身につけておけばよかったと思っています。

学生
体感!

日立造船の使命感!!



地下社会を創造する機械「シールド掘進機」

環境に配慮し、高い技術力で社会インフラや防災に貢献

巨大建造物が命と生活を守る

日立造船株式会社

本誌と学内全学ディスプレイシステム「O+PUS」のメディアミックス企画。今回は、大阪大学との共同研究も盛んな日立造船株式会社を訪問。学生映像制作サークル「OUT+V」のメンバー3人が、日立造船が手がける巨大建造物のスケールの大きさに感嘆の声をあげ、「地球と人のための技術をこれからも」をキャッチコピーにする企業の「モノ作り」の素晴らしさを実感した。

造船業でなく、日立グループでなく

「船をつくっていない日立造船です」との開口一番の言葉に、一同「ええっ」と驚きの声を上げた。個人経営の企業(大阪鉄工所)として造船、橋梁、プラント事業を展開しながら発展し、1943年に当時は日立製作所の傘下にあったことから日立造船株式会社に社名変更。ところが、戦後の財閥解体によって日立グループから独立スタートし、総合重工系企業として発展してきたが、2002年に造船業を分離した。現在取り組んでいるさまざまな事業が、本社ロビーのパネル・映像ブースで展示・紹介されている。「グリーンエネルギー」「社会インフラ整備と防災」が2大柱となり、具体的には▶「ごみからエネルギーへ」の環境事業▶海水淡水化プラントや風力・太陽光発電などのプラント・エネルギー事業▶明石海峡大橋を始めとする橋梁やトンネルを掘るシールド掘進機などのインフラ事業▶船のエンジンや使用済み原子燃料の貯蔵容器などの機械・プロセス機器事業▶GPS海洋ブイやフラップゲート式防波堤などの防災事業—と多角的。これらの背景には、長年培った造船技術のノウハウが生かされている。

全国のごみ焼却施設を見守る遠隔監視・運転支援センター



全国のごみ焼却施設を一括監視

本社には、遠隔監視・運転支援センターが置かれている。最新のごみ焼却施設は、運転データを遠隔からも管理できる仕組みになっており、このセンターは北海道から九州まで、計13のごみ焼却施設を管理する重要な部門だ。現在のごみ焼却施設は、ほとんどの機能が自動運転になっており、各施設にある中央制御室で集中管理している。また、最近では各自治体から運営を委託され、日立造船グループの職員が施設を稼働することもあるが、施設を建設した技術をバックグラウンドとして、このセンターでも大型スクリーンや何台ものディスプレイを通じて中央制御室と同様の環境を作り出し、24時間体制で見守る。各施設でトラブルなどが発生した場合、原因究明、対処方法などをアドバイスする。

このほか、社員食堂やリラクゼーションルーム、診療所なども案内してもらい、レポーター役の小野京香さん(外国語学部2年)は「まるで、(ビル全体が)一つの街みたい」と、目を丸くした。

人も電気も不要、波の力で防波堤

続いて、主力工場である堺工場へ。防災システムの一環として、高潮や津波が発生した場合に人も電気もなしで、波の力を利用する「フラップゲート式可動防波堤」を開発している。ビデオで仕組みを学んだ後、「災害時には停電している恐れがある。また東日本大震災では、水門を閉めに行き津波にのまれた方もいらっしゃった。そんな命を守ることが、私たちの使命だと考えている」との説明に、メンバーは感動にひたした。そして実際に、防波堤のデモンストレーションを行う実証試験も見学。波が流れてくると、その力によって自動的にゲートが立ち上がり見事に波を食い止めた。このシステムは、大きな港用だけでなく、会社、地下鉄、マンションなどで豪雨の時の浸水防止にも対処できる。

地下を掘り進むシールド掘進機

堺工場の主力製品のひとつが地下社会を創造する機械「シールド掘進機」だ。大きなものは口径10mを超す。現在、世界最大のものは、堺工場で製造した口径17.45mのもので、建屋の中でなく、昔の造船ドックを活用して製造された。

シールド掘進機は地下に潜らせ、人間が中



フラップゲート式可動防波堤 防波堤のデモンストレーションの様子。無動力かつ人為操作なしに、波の力を利用して開口部を閉塞する。

で操縦しながら地下鉄やトンネルなどを掘っていく。早いものは1日20~30m進むという。地盤沈下など、地上に影響が出ないようにする高い技術力を求められ、現在は陥没をミリ単位にまで抑えられる。

シールドの語源は「盾と矛」の「盾」。かつては、手掘りする人間を守る防護殻だったからだが、今では先頭部分にカッターヘッドを装備した掘進機の部分が岩盤を掘っていく「矛」の役目も果たしている。曲がったトンネルに対応できるものや、地下鉄における往復二つのトンネルと間のホームとを3本同時に掘れるマルチ型など、さまざまな機種を開発している。

ハイテクとローテクを駆使し

この見学でビデオカメラを回していた笹田智樹さん(経済学部1年)は「ハイテクとローテクが見事に組み合わせられて、私たちの生活を

支えてくれているんだなあ実感できた」、吉山仁望さん(基礎工学部3年)は「学部の先輩のお話も聞けたり、基礎工学がどうやって社会に役立つのかを目の当たりにさせてもらった」と、手応えを感じていた。

そして堺工場で最後、マイクを手に小野さんは「人の命を守る防波堤やシールド掘進機などの機械の大きさとつくる人の偉大さに感動しました」と締めくくった。

大阪大学との共同研究

■Hitz(バイオ)協働研究所(工学研究科)
社仲茶で知られる植物トチュウから採れるゴム物質を利用した、石油製品に代わる新素材の研究開発を進める。数年以内の商品化を目指す。2011年に設置。メンバーは21名。

日立造船先進溶接技術共同研究部門(接合科学研究所)

鉄加工のモノ造りメーカーとして、溶接技術世界一を目指し、2011年1月に設置。接合研が有する世界有数の研究設備を用い、企業単独では行いにくい特殊な溶接や、基礎的な実験を行い、その成果を巨大建造物製造に生かす。

先輩に聞く INTERVIEW

友人などの輪を広げて、幅広い視点を

環境・エネルギー・プラント本部
環境設計部課長代理
小田切 宏 さん (2000年 基礎工学部卒)



——入社を経緯を。
基礎工学部で熱工学を学びました。漠然と「大きな物を作りたい」という思いを持ち、当時はダイオキシン問題などもあったので「これからは環境だ」と決意して、2000年に入社しました。入社以来、ずっと、ごみ焼却施設的设计にかかわっています。
——やりがい、つらい思い出の双方を。

設計といえばデスクに座って図面ばかり引くイメージがありますが、私はお客さんとの交渉、現地での試運転や不具合時の対応など、現場を多く体験しています。入社してすぐに岐阜県での新タイプの実証施設の運転に派遣され、2年目には責任を負う立場になりました。夜中にトラブルが起きた時は肝を冷やす思いもしました。でも、それらがいい経験となって、設計時には具体的な製品のイメージがわくので、早くに現場を経験できたことは良かったと思います。

——学生時代を振り返って。
もっと勉強すれば良かったなあ(笑)サークルなどにも入っていなかったのが、友達は機械系ばかり。もっと輪を広げていたら、社会に出てからいろんな視点をもてただろうし、社会のいろいろな情報を得ることもつながったでしょうね。

——先輩へのアドバイスを。
自分のやりたい仕事に就けるのは少数。何でも楽しむつもりでいれば、常に学べるし、仕事にやりがいを持てるでしょう。学生時代に色々なことにチャレンジして人間の幅を広げてください。



日立造船株式会社
(本社=大阪市住之江区南港北)
1881年、英国人E.H.ハンターが大坂安治川岸に大阪鉄工所を創立。他の造船会社が官からの払い下げからスタートしたのに対し、民の力で造船業を興した。1943年、「日立造船株式会社」に社名変更。戦後に日立グループから独立し、総合重工系企業へ。2010年にスイスのごみ焼却施設の建設を手掛ける「AE&E INOVA AG (現Hitachi Zosen Inova AG)」, 13年に米国の原子力関連会社「NAC International Inc.」の全株式を取得した。製作したシールド掘進機は約1250機(海外約120機)。資本金約454億円、工場は大阪、京都、広島、熊本、茨城などに7カ所。従業員数は連結約9000人、単独約3000人。大阪大学卒業生は、文系も含めて約100人。現・古川実会長兼CEOも1966年経済学部卒業。「日立造船は社会に役立つ価値を創造し、豊かな未来に貢献する企業。やる気のある阪大生はどんどん来てください!」とのパワフルなコメントをいただいた。
企業URL <http://www.hitachizosen.co.jp/>



Company Visit report
企業訪問

2014年6月発行
大阪大学ニュースレター64号 掲載
企業訪問より

マネジメント層が利用する
サークル型ワークステーション
「HARMONii(ハーモニー)」
(左から) 笹田さん、貫名さん、
下田さん、中野さん、太田さん、
新谷さん

オフィスがシアターに

顧客に直接体感してもらって 働きやすい環境を社員が創出

学生体感! コクヨの発想力!!

コクヨファニチャー株式会社

本誌と学内全学ディスプレイシステム「O+PUS」のメディアミックス企画。今回は、大阪・梅田のグランフロント大阪にあるコクヨファニチャー株式会社のライブオフィスを訪問。社員が実際に働いているオフィスをショールームとして顧客に見てもらい、販売や商品開発へとつなぐ取り組みを見学した。活気あるオフィスの様子に接した学生映像制作サークル「OUT+V」のメンバー3人は、2015年に創業110年を迎える老舗企業に息づく、しなやかで熱い創意工夫のスピリットをしっかりと受け止めているようだった。



オブジェが印象的なエントランス

コクヨファニチャー株式会社
(本社=大阪市東成区大今里南6-1-1)
コクヨグループの中でオフィス家具や公共家具等の製造販売、商業施設等さまざまな空間のデザイン、トータルサポートを行う。持ち株会社であるコクヨ株式会社は1905年創業。富山出身の黒田善太郎が和式帳簿の表紙を作る「黒田表紙店」を始めたのが起り。1917年「故郷富山の誉になる」との誓いを込め商標を「国誉」とする。創業当時の精神「世の中の人が進んでやろうと思わない仕事にこそ、自ら進んで徹底して取り組む」は、現コクヨグループの経営理念「商品を通じて世の中の役に立つ」につながっている。60年にファイリングキャビネット、70年にスティックのり「プリント」、75年にはキャンパスノートを発表。79年東京・品川に新社屋完成。2004年ステーションリー関連事業、通販・小売り関連事業と分かれ、ファニチャー関連事業部門として同社に分社。

「ゼロ・リセット」空間で出迎え

グランフロント大阪ナレッジキャピタルタワーC12階のフロア全体が、ライブオフィス「ワークスタイルシアター」だ。東京・霞が関、品川に続き、2013年にオープンして1年。営業、設計など3部門の社員が働く。

壁も天井も透明感のある白でデザインされたエントランスは、来訪者への「ゼロ・リセット」空間と位置付けられている。まず目に飛び込んでくるのが、同社製品である緑色オフィス用メッシュチェアの背もたれを何枚も使い、木に見立てたオブジェ。「いろいろな人が集い、新しい価値を創り出しながら成長するイメージを表現しています」。関西営業本部・大阪営業支援部長、太田博昭さんの説明に、リポーターの中野聡美さん(文学部2年)が「真っ白な空間に続き、インパクトがありますね」と見上げる。



「カフェサロン」はくつろげる空間

ステーションリー部門と分離

同社は、「キャンパスノート」やスティックのり「ブリット」で知られるステーションリー部門のコクヨS&T株式会社と並び、コクヨグループの主力を担うオフィス家具部門の会社だ。「働きやすい空間と使いやすい家具」を提案、製造販売する。ライブオフィスの取り組みを始めた時期は早く、現在の本社社屋(大阪市東成区)ができた1969年。コクヨ社員が実際に働くオフィスを見てもらい販売に結び付けると同時に、社員自身が自社製品を使う中で生まれる意見を改良や開発につなげる現場主義を貫く。

ひらめき・はかどり・ここちよさ

グループ全体のブランドメッセージは「ひらめき・はかどり・ここちよさ」。このフレーズを合言葉に、現場から生の声がライブオフィスの職場環境・空間づくりに反映される仕組みを取り入れている。例えば、オフィスのあちこちにある意見募集のボード。社員は気づいた要望などのメモを貼り付け、それをもとに改善、ルール変更などが柔軟に行われる。

仕事の内容に合わせて自由自在

オフィスでは、仕事の内容に合わせて違うタイプの机や椅子が使われている。固定席は見積もりや発注を行うデスクワークが多いスタッフ用。長時間座っても疲れにくい椅子を用いている。外出がちな営業スタッフは自由席で、小学校の席替えのように、対話が円滑に進むよう机と椅子が配列され配置替えもできる。「コラボパーク」と名付けられた一角には人工芝が敷かれ、違う部署のスタッフ同士が気軽に集まり、天井からは鳥のモビールも。さらに、外来者との打ち合わせや社員の休憩の場としてソファでコーヒーなどが飲める「カフェサロン」もある。

「まるで近代都市のオフィス」と中野さん。阪大OBの貫名英一さんは「毎日多くのお客様が来られ、私たちは見られていることで仕事にリ



人工芝が敷かれた「コラボパーク」

ズムができます。見てもらって提案ができ、意見をキャッチボールするのです」と笑顔で応えた。

ものづくりは難しいけれど楽しい

続いて、11階にあるショールーム「ワークスタイルミュージアム」へ。こちらは、事務所や会議室などでの課題を、空間と家具を通じて解決する方法を提案。部屋のモデルが用意され、可動式の壁で広さを実感したり、コンピュータのシミュレーション画面で色別の空間イメージを確認したりできる。会議用テーブルが並んだコーナーでは、製品を開発した阪大OBの新谷英之さんが、簡単なレバー操作で天板が畳め、



- 針なしステープラー「ハリナックス」
- 案に切れるハサミ「エアロフィット」
- ロングセラーの「キャンパスノート」
- テーブルの「ドットライナー」

収納時の厚みを日本最少クラスまで絞り込み省スペースを実現させたエピソードを紹介。「ものづくりは難しいけれど面白い。やるほどに興味が出てステップアップします」と語った。

考え抜かれた製品群に感動

見学を終え、ビデオ撮影を担当した笹田智樹さん(経済学部2年)は「効率を上げるため、オフィス環境から工夫していくという考えは新鮮で興味深く感じました」と話した。今回初参加の下田啓太さん(基礎工学部1年)は「後ろにスーツ掛けが付けられている椅子など、製品一つ一つが考え抜かれていて、びっくりしました」との感想。そして、マイクを握り果敢に質問した中野さんは「皆さんが生きて働いていらっしゃるのが印象的。OBの方も『大変だけど楽しい』とおっしゃり、私もそう感じられる仕事に就きたいと思いました。家具など物一つ一つにストーリーが見える気がしました」と話していた。

先輩に聞く INTERVIEW

旅行、クラブ… 勉強以外にも熱中

上席執行役員
ものづくりバリューユニット副ユニット長
貫名 英一さん (1985年 工学研究科修了)
ものづくりバリューユニット
コミュニケーションVT
新谷 英之さん (2008年 工学研究科修了)



貫名さん 新谷さん

—大学での学びは活かされていますか？

貫名 テーマを決め、調べ、検証しまとめるといって、大学の研究で経験したプロセスは役に立っています。
新谷 大学での勉強が直接活かされる仕事に就ける人は多くないと思います。不具合が生じて原因を探る時に、現象を基礎的な観点から考えるタネは、大学の勉強の中にあっただいえます。

—つらいことは？

貫名 面白かったことの方が多い。入社当時、古い工場がトラブルが続発し、何とかしようと対処しながら勉強し、壊れない工場に改造していった。社会人になってから勉強です。

—入社の動機は？

—どんな学生時代を？

貫名 アルバイトでお金を貯め、毎年のように中国、ソ連(当時)、ヨーロッパへ海外旅行をしました。シベリア鉄道で端から端まで1万キロ移動したことなど、いい経験でした。
新谷 器械体操部に所属しアルバイトでも体操を教え、体操漬けの生活でした。教えることで、人それぞれに感覚や理解の仕方が違うことを知り、人に伝えるにはどうしたらいいか考えるようになりました。
—阪大生へのメッセージを
貫名 勉強以外に集中する何かを持ってほしいですね。
新谷 人がやっていないことに勇気をもってチャレンジしてほしい。

III 社会との交流

III 社会との交流

Collaborations
between
industry and academia

2014年1月発行
阪大NOW 139号 掲載
「濃いつ! 阪大教育研究編」より

世界初! 内視鏡を通して 消化管内の洗浄と吸引を行う

「エンドシャワー®」

山科精器株式会社との共同研究により開発

臨床医工学融合研究教育センター
次世代内視鏡治療学共同研究部門特任教授
中島清一 Kiyokazu Nakajima



前臨床試験(動物実験)
企業と共同で開発した試作品の性能を、大型動物を用いて詳細に評価する



●中島清一(なかじま きよかず)
1992年大阪大学医学部卒、第一外科で研修。
1999年大学院医学研究科博士課程修了(医学博士)。米国コーネル大学外科、大阪労災病院外科を経て、2006年大阪大学大学院医学系研究科消化器外科助教。同講師を経て、2012年大阪大学臨床医工学融合研究教育センター次世代内視鏡治療学共同研究部門特任教授。専門は消化器外科、内視鏡外科および関連機器開発。



エンドシャワー®
ENGINEが上市した2品
目のデバイス(山科精器株
式会社との共同開発)

大阪大学の強みである産学連携。特に共同研究は、金額・件数ともに年々増加を続けています。今回は、共同研究の成功事例の一つとして、臨床医工学融合研究教育センター次世代内視鏡治療学共同研究部門の中島清一特任教授から、山科精器株式会社との共同研究成果に加えて、産学連携活動に至る経緯について寄稿いただきました。

負担や苦痛の少ない外科治療をめざして

近年の外科治療においては、患者さんの負担や苦痛をできるだけ軽くする低侵襲内視鏡治療が急速に普及しつつあります。我が国は、世界的な内視鏡メーカーを複数擁し、整備されたメディカル・インフラや国民皆保険制度のおかげで癌の早期発見率も非常に高いことなどから、内視鏡治療の領域で長く世界を牽引してきました。現在、我が国の内視鏡治療は世界最高水準にあり、国内ではさらに難度の高い複雑な治療を内視鏡で行おうとする医師達のためまぬ努力が続けられています。

しかしながら、内視鏡治療の適応拡大はほぼ限界に達しつつあり、医師のスキルのみでこれ以上複雑な治療を行うのは技術的に困難となっています。例えばNOTES(Natural Orifice Transluminal Endoscopic Surgery: 経管腔的内視鏡手術)と呼ばれる新しい治療方法では、口から入れた胃カメラで胃壁に孔をあけ、おなかの中(腹腔内)の臓器を摘出する、といった手術が理論的には可能ですが、現行の内視鏡や手術機器だけでは、たとえ世界最高レベルのスキルをもってしても実現は

困難です。NOTESのような次世代の内視鏡治療を安全に実施するためには、革新的な手術機器(デバイス)の開発が不可欠なのです。

産学連携コンソーシアム「プロジェクトENGINE」

実際に開発すべきデバイスの姿は見えていますが、我々医師にはそれらを実現する「ものづくり技術」はありません。そこで我々は2008年、大阪商工会議所主催の「次世代医療システム産業化フォーラム」において、「次世代超低侵襲内視鏡治療関連機器の共同開発」という提案を行いました。反響は予想以上に大きく、多くの企業から共同開発の申し入れをいただきました。産学連携コンソーシアム「プロジェクトENGINE」(Endeavor for Next Generation of INterventional Endoscopy)はこうして誕生し、幸いにも複数の大型競争的資金を獲得して正式に活動を開始しました。以来ENGINEは本学大学院医学系研究科(消化器外科、消化器内科)、大阪商工会議所、さらには本学産学連携本部からの強力な支援を背景に活動の幅を拡げ、2012年10月には本学臨床医工学融合研究教育センターに「次世代内視鏡治療学共同研究部門」を開設し、本学における産学連携活動の一点として多くの企業の牽引役を果たしています。

内視鏡用洗浄吸引カテーテル「エンドシャワー®」

発足以来5年弱で、ENGINEは計6件の経済産業省委託事業に採択され、2012年以降は上市2品、上市予定4品と着実に成果を挙げつつあります。なかでも2013年に山科精器株式会社(滋賀県)から上市を果たした内視鏡用洗浄吸引カテーテル「エンドシャワー®」は、内視鏡を通して消化管内の洗浄と吸引を行える世界初のデバイスであり、たった外径2.6mmのカテーテル先端に径0.4mmの微細な孔を24個設けるといった同社の超精密加工技術が高く評価され、MEDTECイノベーション大賞「チャレンジ賞」、モノづくり日本会議・日刊工業新聞社超モノづくり部品大賞「健康・医療機器部品賞」、さらには第5回ものづくり日本大賞「特別賞」を受賞、臨床医工学融合研究教育センターの成功事例として、本学を代表して文部科学省「平成24年度産学官連携活動成果事例集」に取り上げられました。2012年からは関西イノベーション国際戦略総



ものづくり日本大賞授賞式
茂木敏充産学連携本部から特別賞を授与された
(右端が中島特任教授)

合特区における実証事業にも取り組み、2013年からはシンガポール国立大学と共同で軟性内視鏡ロボットの開発に着手しています。

ものづくりから学問を紡ぎ出す

我々がめざす産学連携活動は、単に医師のニーズをもとにした「ものづくり」ではありません。ものづくりの過程は多くの学術的な知見をはらんでおり、知的創造の刺激に満ちあふれています。これまでに我々は100を超す学会発表、20を超える学術論文に加え、30を超す特許出願を行ってきました。これらは「も

ものづくり」の派生物ではなく、「ものづくり」の本質、イノベーションの成果そのものなのです。これからも患者さんに貢献できる革新的な医療機器の開発を通じて、さらに多くの知的財産を創出し、医工融合領域の優秀な人材を育成するとともに、「ものづくりから学問を紡ぎ出す」真摯な活動を続けていきたいと思っています。若い研究者の皆さん、本学開学以来の伝統である「実学」精神をおおいに発揮して、ともに世の中に貢献していこうではありませんか。

産学連携本部からの お知らせ

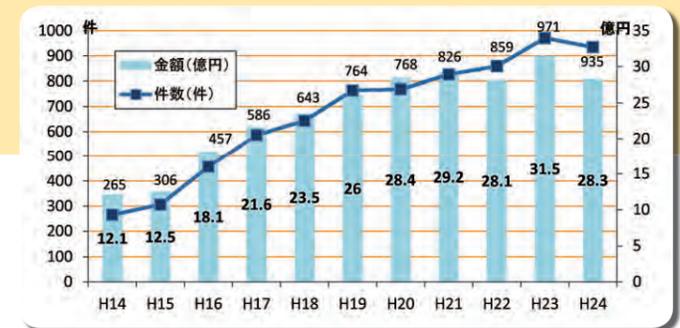
「地域に生き世界に伸びる」をモットーに掲げる大阪大学では、本学の有する新たな研究成果を活かし国内外の産業界へ大きな発展をもたらすためにも、産学連携のより一層の充実化と強力な推進が求められています。平成23年4月には、従来の様々な産学連携活動を踏まえ、窓口の一元化やさらに強固な産学連携活動推進のため、産学連携本部を設置しました。

これまで産学連携本部では、大学内に産業創出拠点を置く「Industry on Campus」構想を掲げ、全国に先駆けて設置した「共同研究講座」制度の創設や技術移転活動などにより、様々な産業界との連携に取り組んで参りました。平成23年度からは、テクノアラ

イアンス棟の完成に合わせ、キャンパス内に企業の風を吹き込む「協働研究所」「協働ユニット」を運用開始し、さらに発展した産学連携活動に取り組んでいます。

総合企画推進部では、産業界との共同研究(協働研究所、共同研究講座を含む)の企画や推進、起業化支援等を進めております。これらの内容に関して、ご質問、ご相談がございましたら、下記までお問い合わせください。

【問い合わせ先】
産学連携本部 総合企画推進部
電話：06-6879-4206
Email: contact@uic.osaka-u.ac.jp
URL: http://www.uic.osaka-u.ac.jp/



大阪大学の外部資金獲得状況(共同研究)

Collaborations
between
industry and academia

2013年9月発行
大阪大学ニュースレター61号 掲載



企業トップが交代で教壇に

学生と本気の対話で 理解深める

人材育成方針、学生時代の過ごし方などに興味津々

日本を代表する企業トップが交替で教壇に立ち、学生からの質問をその場で受け、対話する授業が大阪大学にある。全学共通教育科目・先端教養科目「関西は今～関西経済界のリーダーたちとの対話～」だ。学生と経営者が同じ目線で語り合う、貴重な意見交換の場として機能している。



講義の企画を担う、関西サイエンス・フォーラムの担当者と大阪大学教員

平成25年度「関西は今 関西経済界のリーダーたちとの対話」講師一覧			
第1回	4月 15日	萩尾 千里 氏	(株)大阪国際会議場 相談役
第2回	4月 22日	土屋 裕弘 氏	(株)田辺三菱製薬 社長
第3回	5月 13日	堀場 厚 氏	(株)堀場製作所 会長兼社長
第4回	5月 20日	樋口 武男 氏	大和ハウス工業(株) 会長
第5回	5月 27日	小嶋 淳司 氏	がんこフードサービス(株) 会長
第6回	6月 3日	村尾 和俊 氏	西日本電信電話(株) 社長
第7回	6月 10日	金田 嘉行 氏	ソニー(株) 元副社長
第8回	6月 17日	鈴木 博之 氏	丸一鋼管(株) 社長
第9回	6月 24日	鳥井 信吾 氏	サントリーホールディングス(株) 副社長
第10回	7月 1日	角 和夫 氏	阪急電鉄(株) 社長
第11回	7月 8日	古川 実 氏	日立造船(株) 会長兼CEO
第12回	7月 22日	持田 周三 氏	(株)朝日新聞社 常務・大阪本社代表
第13回	7月 29日	松下 正幸 氏	パナソニック(株) 副会長
第14回	8月 5日	大林 剛郎 氏	(株)大林組 会長

社会、産業の「今」を伝える

「関西は今～関西経済界のリーダーたちとの対話～」が正規の先端教養科目としてスタートしたのは2006年。「学生が企業トップの声を直接聞き、社会や産業の動きをキャッチする場を提供する」との趣旨で開講されている。発足時の主催は大学教育実践センターで、現在は全学教育推進機構がそれを引き継ぎ、関西経済同友会と関西サイエンス・フォーラムが協力している。

科目の立ち上げに尽力した関西サイエンス・フォーラムの萩尾千里専務理事は、「同友会のメンバーをはじめ、関西だけでなく日本を代表する経営者に教壇に立ってもらっています。大学は本来理論を学ぶ場ですが、この講義では座学だけではわからない、さまざまな人の営みを知ってほしい」と語る。講師の人々には、それぞれ企業の利害から一歩離れた立場から経営を語ってもらうようお願いしているそうだ。

「事務手続きが煩雑になる」などの理由で、他大学ではなかなか進まない企画であるが、大阪大学だからこそ成立した講義なのだという。経済活動の将来を見据えた考え方を社会に還元したいという経営側と、生きた経営の声を聞くことで学生自身が自らの力で将来を考えられるようにしたいという大阪大学側の、双方の考えが一致したのだ。

「財界トップの人たちであっても、教壇に立つのは緊張されるようで、「私など、とてもとても」と固辞される方も多いんですよ。でも、実際に学生との対話をする、様々な収穫もある

関西は今

～関西経済界のリーダーたちとの対話～
平成25年度・第13回講義



パナソニック(株)
松下正幸 副会長

みたいで、一度お受けくださった方には非常に好評です。今では、毎年の講義を楽しみにして下さる経営者の方もいらっしゃいます」と事務局。

自己成長のスプリングボードに

毎回の講義の司会を担当する坂尻彰宏准教授(全学教育推進機構)は「多くの学生たちは、いつも真剣に話を聞いているなど思います。とりわけ、経営者の皆さんから各企業の人材育成方針やご自身の学生時代の過ごし方などに関する話が出た時には、はっきりと反応が変わるのを感じます。今後の学生生活や就職活動を充実させるための貴重な情報源にしようと思っているので」と説明する。

講義の後の質疑応答では、学生から、経営者が回答に困るような鋭い質問が飛び出ること。それに対して、決して誤魔化すことなく真剣に回答を試みる講師の一言ひとことに学生が耳を傾ける。授業ごとに課される小レポートにも、講義の内容や受講して考えたことなどがびっしり書き込まれる。

全学教育推進機構長の江川温教授は、「多くの学生が、卒業後に企業とかかわりをもちますが、なかなかその想像力が働かないのです。企業社会に受動的に飲み込まれてしまっているはいけませんが、まず企業とは何か、企業人は何を考えているかを知って、今後の糧としてほしい」と語る。

今や200人の大講義室を満員にするほどの人気講義となった先端教養科目。自己成長へのスプリングボードにしてほしいというのが、運営サイドの願いである。



平成25年度の講義のうち、7月29日にはパナソニック(株)の松下正幸副会長を講師に迎えて実施された。

講義タイトルは「グローバル企業へのパナソニックの挑戦」。松下副会長は、パナソニックの今後について「当社は海外販売比率を高めようとしている。従業員も外国人と日本人の入り交じりはさらに進行するだろう」。さらに「世界各地でBtoBのビジネスモデルをより推進していく」とも付け加えた。

さまざまな経済連携協定の交渉の行方を注視しつつ、新興国市場では、ボリュームゾーン攻略による新たな市場開拓をめざし、商品開発を進めているという。一例として、インドでの生活実態調査が、停電時の対応にすぐれた節水型洗濯機の開発につながったことを紹介した。

講義後半は、経営理念をめぐる話となった。

「企業理念は、企業の存在意義、目的などを考える拠りどころ。創業者・松下幸之助は『企業は社会の公器』という経営理念をもっていました。この考えは、江戸時代上方の商人道徳にさかのぼるものです。石田梅岩の石門心学はその代表です。また、近江商人の『三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)』の発想は、現代のCSR(企業の社会的責任)の原点です」

パナソニックの企業経営の考え方は、関西の精神的土壌と切り離すことができないことを示した。

学生に対するメッセージは「これからの企業には、個人の力が必要。世界と地域を見つめ、一人一人がグローバルチャレンジャーとして、やり抜く力をもってほしい」。そのために「①素直な心 ②国際性 ③自主独立」の3点が重要とした。

新しい商品、サービスで勝負

続いて、質疑応答が行われた。学生たちからのさまざまな質問に対し、松下副会長は一つ一つ丁寧に答え、熱のこもる議論が続いた。

●TPPが締結された場合、パナソニックは具体的にどう対処しますか。(経済学部男子)

松下副会長 グローバルに活動する企業としては、TPPだけでなく、経済連携協定は好ましい。戦略の自由度が増す。ただ、生産拠点を一カ所に集約するのはリスク。世界各地への分散を考えている。

●最近、サムソンなど韓国系のメーカーの活躍が目立ちますが、彼らの強みは?(外国語学部女子)

松下副会長 韓国で活躍する企業は財閥系。政策的に優遇され、経営環境に恵まれている。またトップの力が強いので、迅速な経営判断をする。これらが強みだ。だが、中国メーカー

が台頭する中、今後もコスト競争に巻き込まれない新規な商品を作れるか。日本企業は、コスト競争で勝負するのは難しい。我々は新しい商品、サービス、ソリューションを新しい技術で提供していく。

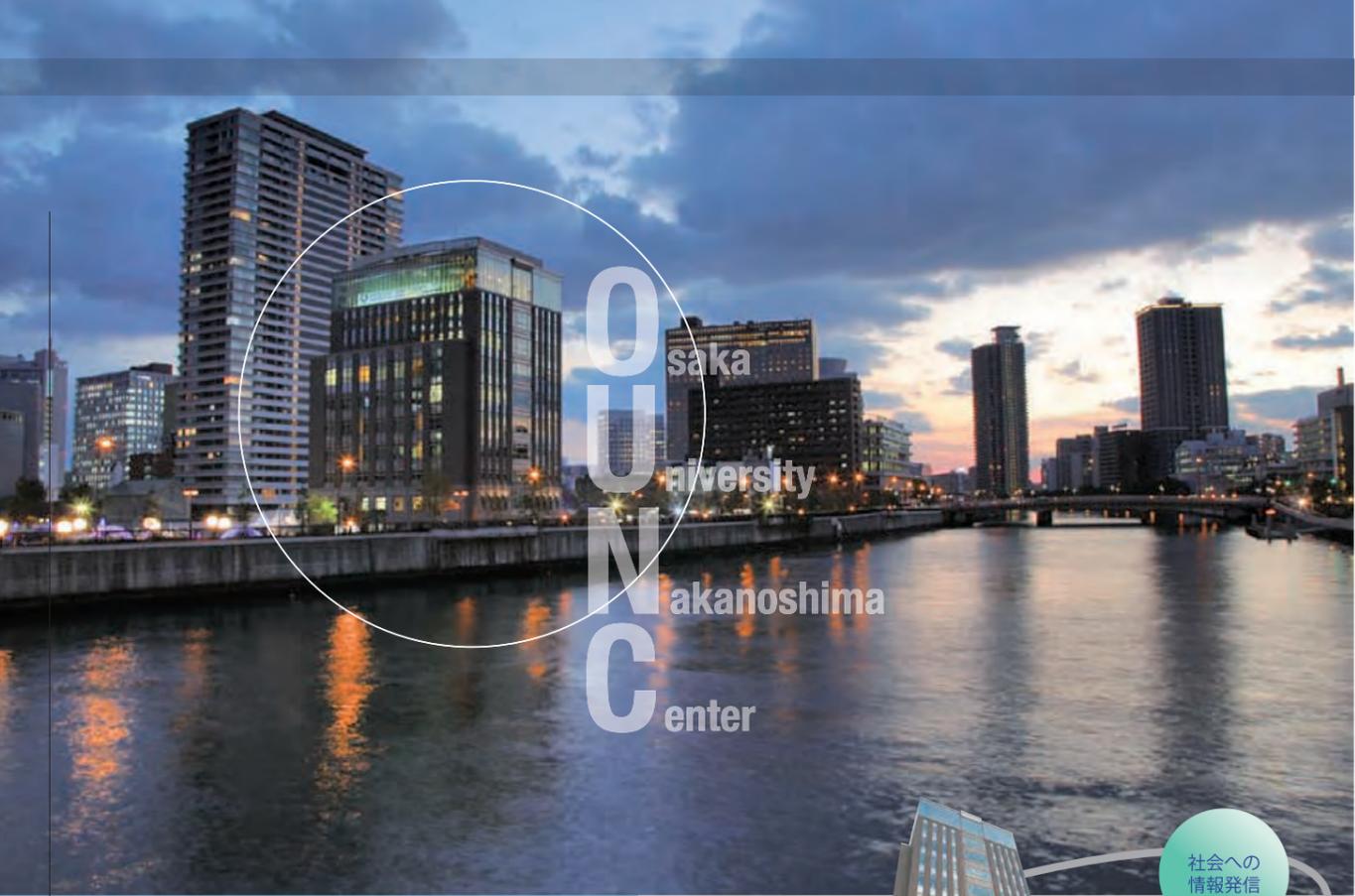
●「松下幸之助初代社長の経営理念も見直しが必要」という意見もあると新聞で知ったのですが、どうでしょうか。(文学部男子)

松下副会長 理念と戦略、対策は切り離して考えるべきだ。幸之助の理念はどんな時代、地域でも通用する。ただ、その時々戦略は、今から見れば古いと感じられることもあるだろう。我々は幸之助の理念を受け継いでいくつもりだが、幸之助がとってきた戦略まで金科玉条にするのは避けたいと思っている。

経営理念は関西と密接に
パナソニック副会長が語る世界戦略

III 社会との交流

III 社会との交流



Osaka University
Akanoshima Center

知的情報の発信と 交流のフロンティア

大阪大学 中之島センター
URL <http://www.onc.osaka-u.ac.jp/>

大阪大学中之島センターは教育・研究、社会への情報発信、交流の機能を備えた社会貢献の拠点として2004年4月、大阪・中之島に開設しました。
教育プログラムをはじめ、さまざまなイベント、公開講座などを開催し、6階フロアには、大学関係者、一般市民の方などセンター利用者が自由に活用できる空間として、飲食可能、パソコン環境(無線LAN、電源を利用できます)を整えた「リエゾン・commons」を設置するなど、社会と大学との交流の場として活用されています。



10F	佐治敬三メモリアルホール(192席)
9F	交流サロン「サロン・ド・ラミカル」 特別会議室(12席)/会議室1(16席) 会議室2(16席)
8F	智適塾
7F	講義室702(60席)/講義室703(105席)
6F	共通自習室(図書室) リエゾン・commons/605/607/608
5F	講義室507(72席)
4F	講義室404(36席)/講義室405(36席) 講義室406(72席)
3F	講義室301(75席)/講義室302(42席) 講義室303(42席)/講義室304(102席)
2F	講義室201(54席) カフェレストラン「スコラ」
1F	情報サービス/展示コーナー/事務室 ロビー



Osaka University Tokyo Office



施設概要

開館日・利用時間等 月曜日～金曜日 午前10時～午後7時
土曜日 午前10時～午後5時
休館日 日曜日・祝日、12月29日～1月3日
※都合により、臨時で休館する場合があります。
場所 〒100-0013 東京都千代田区霞が関1-4-1 日土地ビル10階
連絡先 大阪大学 東京オフィス
Tel:03-6205-7741 fax:03-6205-7743
E-mail: ou-tokyo-office@ml.office.osaka-u.ac.jp

利用できる施設

施設名	多目的室1・2	多目的室1	多目的室2	共用スペース
利用可能人数	30名	18名	12名	11名
面積	45㎡	27㎡	18㎡	
共用設備	右記のとおり			複合機1台
予約	予約要(1,2別々に利用可)			予約不要
利用料	有料(当分の間無料)			無料

アクセス

- 東京メトロ銀座線 「虎ノ門」駅 7号出口から北へ徒歩1分
- 東京メトロ千代田線・日比谷線・丸の内線 「霞ヶ関」駅 A12号出口から南へ徒歩3分

未来を見据えた 首都圏での活動拠点

大阪大学 東京オフィス
URL <http://www.osaka-u.ac.jp/ja/academics/facilities/tokyo/office>

大阪大学は、創立100周年を迎える2031年に「世界トップ10の大学になる」という夢の実現に向け、研究・教育の飛躍的な発展を目指すべく、首都圏における本学の活動拠点として「大阪大学東京オフィス」を開設しました。
本学教職員、学生、卒業生ほか大阪大学関係者の方などにご利用いただけます。



国の登録記念物

阪大の至宝 マチカネワニ

1964(昭和39)年、大阪大学豊中キャンパスでは、当時中之島にキャンパスがあった理学部の新校舎建設工事が行われていました。その最中である5月3日、当時予備校生だった人見功さん(現在高村功さん)らが「何かの骨片」と思われる化石を発見しました。それが、後に日本の古脊椎動物学の歴史を揺るがす大発見の序章でした。

人見さんが発見した骨片は、マチカネワニの肋骨の一部でした。最初は「ゾウの化石かと思った」(人見さん)とのことだそうです。発見の翌日、大阪市立自然科学博物館(現在は自然史博物館)に鑑定を依頼したところ、すぐに発掘チームが発見し、5月10日に専門家による現地調査を経て、6月中旬から計4回にわたる発掘が開始されました。2回目の発掘(9月17日~18日)で、頭骨を含む大部分の化石を発掘。ここでようやく化石の正体は「ワニ」であることが判明しました。

マチカネワニ化石は、日本で発見されたワニ類の骨格化石の第1号であり、世界的に見てもワニ化石の中で最も完全な全身骨格化石の一つです。マチカネワニは日本の古脊椎動物学の歴史上最も重要なものとされています。

マチカネワニと同じ種類の可能性があるワニ化石が、その他の地域からも発見されています。その一つが、大阪府岸和田市流木町から発見された約60万年前のキシワダワニ化石です。最新研究では、キシワダワニはマチカネワニと同じトミストマ亜科とされています。よって、トミストマ亜科のワニが少なくとも60万年前には日本の地に現れていたことがわかっています。また、中国の歴史時代のデルタ堆積物から見つかったワニの骨格が、マチカネワニに類似しているという説もあり、近年までマチカネワニが生きていた可能性が指摘されています。

マチカネワニは全身骨格化石が発掘され、その後の研究で新しい種(1965年)および新しい属(1983年)を提唱する根拠となった標本(タイプ標本)に指定されています。

その実物は大阪大学総合学術博物館に常設展示(写真下)されています。

- 参考文献：小林快次・江口太郎、大阪大学総合学術博物館 叢書5『巨大絶滅動物 マチカネワニ化石-恐竜時代を生き延びた日本のワニたち』(大阪大学出版会、2010年)、など
- 協力：きしわだ自然資料館



発見当時(1964年)の大阪大学理学部



理学研究科本館西側にて、発掘した記念の場所を標するものとして「Machikaneyama」が建てられている。

2014年4月発行
阪大NOW 140号 掲載
「濃いつ!阪大-マチカネワニ編-」より

世界で阪大博物館のみ! マチカネワニ化石の実物展示



大迫力のマチカネワニ 全身骨格化石(実物)

阪大総合学術博物館には、マチカネワニ化石の実物が常設展示されています。多くの博物館では、タイプ標本やそれに準ずる貴重な化石の実物は非公開となっていますが、阪大ではいつでも実物を観ることができます。総合学術博物館3階常設展「待兼山に学ぶ」に展示されています。発掘50年を機に、ぜひ一度訪れてみませんか。

TALK 13

10月20日(月) 吹田キャンパス
大阪大学コンベンションセンター (MOホール)
17:00-18:30(開場時間:16:30)



丹羽 一郎
niwa ichiro

前中華人民共和国駐劄特命全権大使
前伊藤忠商事株式会社 取締役会長
早稲田大学特命教授

サテライト会場
東京オフィス(豊中) 吹田キャンパス(大阪大学会館講堂) 豊中キャンパス(7F 吹田ホール) 箕面キャンパス(7F 吹田ホール) 中之島センター(佐治敬三ホール)

TALK 14

11月13日(木) 豊中キャンパス
大阪大学会館(講堂)
17:00-18:30(開場時間:16:30)



小林 誠
kobayashi makoto

高エネルギー加速器研究機構 特別荣誉教授
ノーベル物理学賞受賞(2008年)

サテライト会場
東京オフィス(豊中) 吹田キャンパス(吹田会館三和ホール) 箕面キャンパス(7F 吹田ホール) 中之島センター(佐治敬三ホール)

TALK 15

12月15日(月) 吹田キャンパス
大阪大学コンベンションセンター (MOホール)
17:00-18:30(開場時間:16:30)



明石 康
akashi yasushi

公益財団法人国際文化会館 理事長
元国連事務次長

サテライト会場
東京オフィス(豊中) 吹田キャンパス(大阪大学会館講堂) 豊中キャンパス(7F 吹田ホール) 箕面キャンパス(7F 吹田ホール) 中之島センター(佐治敬三ホール)

TALK 16

1月23日(金) 吹田キャンパス
大阪大学コンベンションセンター (MOホール)
17:00-18:30(開場時間:16:30)



野依 良治
noyori ryoji

独立行政法人理化学研究所 理事長
ノーベル化学賞受賞(2001年)

サテライト会場
東京オフィス(豊中) 吹田キャンパス(大阪大学会館講堂) 箕面キャンパス(7F 吹田ホール) 中之島センター(佐治敬三ホール)

※ 申込不要・先着順・参加費無料 大阪大学未来トーク 2014 検索 22世紀に輝く

大阪大学未来トーク

【サテライト会場でも未来トークを体験!】

様々な分野で活躍中の著名な方に、世界の最先端情勢を、次世代リーダーたちに向けて講演していただく『大阪大学未来トーク』。22世紀へ何を受け継ぎ、何を発展させるのか、気づきのヒントがきくと得られるはずです。専門分野を超えた俯瞰的視点を身に着ける機会。お見逃しなく。

メイン会場とは別にサテライト会場を各キャンパスに設け、吹田・豊中・箕面・中之島・東京オフィスのどの地域でも未来トークを聴講していただけるようになりました。

どなたでもご参加いただけます。ご参加に当たり当日お手伝いが必要な方はお申し出ください。

大阪 豊中・箕面・中之島 東京 東京オフィス

お問い合わせ先 大阪大学未来戦略支援事務室総務係
Tel: 06-6210-8244 Fax: 06-6210-8241 Email: mirai-talk@iai.osaka-u.ac.jp

大阪大学未来戦略機構 Institute for Academic Initiatives 大阪大学 OSAKA UNIVERSITY